

---

# 報復屋ゼットー "Am I the number Z"

消炭灰介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

報復屋ゼットー ” A m I t h e n u m b e r z ”

### 【Nコード】

N 6 8 1 6 M

### 【作者名】

消炭灰介

### 【あらすじ】

この世のどこかに存在すると言われる復讐代行業者、報復屋ゼットー。店主代理のツユリを筆頭に運転手マツ、諜報員サイ、拷問官ハルアキ、戦闘員トウカ、技師ミモリ、祈祷師ミヤギ、医師シミズの八人の男女が所属するアングラ組織を舞台に繰り広げられる人と人との摩擦が生み出す歪みの物語。

夜は降らない。

「我々が扱う商品は感情だ。それはとても繊細でたらめなものだから行動の果てに起こる結末は我々にはおるか依頼者にすらわからない」

報復屋ゼットー店主、ゼットー

たとえば今、目の前に倒れている少女に向かって私は手を差し伸べてみる。

体は垢まみれ、服もぼろぼろ、みすばらしいを通り越して汚らしい少女だ。

そんな少女に私は甘く囁く。

「復讐したくないか？」

「ふくしゅう……？」

意味を掴みかねるのか、少女は地面にはいつくばったまま首をかしげる。

「そう、お嬢ちゃんをそんな目にあわせた奴に仕返ししてやるんだ」  
見開かれた大きな瞳は私を捉える。少女は頷くと、私の手をとった。

おもしろいだろう？ これでまた一つ私の敵が増えることになる。  
おかしいだろう？ 不思議と笑いが込み上げてくる。

そんな私を見て少女は首をかしげた。

「おじちゃんはだれ？」

少女の言葉に後ろに控えていた部下が遠慮せず噴き出す。

おそらく『おじちゃん』なるワードが彼のツボに嵌ったのだろう。

ああ、そうとも、否定はしないさ、私はどう見ても頭から足の先までおじちゃんだ。ただし白髪まじりの髪の毛はロマンスグレーと呼ぶようにしなさい。

閑話休題、話がそれってしまったな。少女は私の名を問うた。ならば私は応えねばならぬ。世界のために、平和のために、私は名乗ろう。

「我が名はゼットー、この世の全てを敵にまわす者だ」

そう、我が名はゼットー、世界の安寧を望むただ一人の悪だ。

慎重な狗は三日飼われた恩を忘れない。

「やめてくれ、これ以上敵が増えることなんて考えたくもない」

報復屋ゼットーかたまつねい 諜報員、風祭彩

「うう」

なんの変哲もないオフィスビルの一室、部屋の片隅　一番偉い人が座るその席に突っ伏した状態で美少女が呻いている。

放っておくことは可能だが、ここでスルーしたら後が怖いのでサイはしぶしぶ、パソコンのキーを叩く手を止めずにリアクションを起こす。

「どうした？　ツユリ」

サイの席からツユリの席までは少し距離があるが、二人きりの事務所は声を荒げる必要なく言葉が届く。

「めんどくさい」

ツユリは机に伏したまま答える。艶やかなセミロングの黒髪は自ら掻き毟ったせいではさばさで、突っ伏しているせいで高すぎず低すぎずの鼻は潰れてしまっている　つまり美少女台無しである。

「なにが？」

再びのサイの問いに、顔を上げ、澄んだ切れ長の瞳を細めツユリは逡巡。の後、ひねり出したように返答を口にする。

「……………け、いご？」

「敬語…………」

意味がわからない答えにサイはただ言葉を反復するのみ。

「そう、敬語、何で敬語なんてあるんだろうめんどうくさい」

めんどくさいのはお前だ。サイは素直にそう思う。けれど、彼女が年相応の言葉と態度が許されるのは、今この時、この場所だけなのをサイは知っているので、努めてやさしく言葉を選ぶ。

「みんなツユリの頑張りはわかってるって、ツユリがいなきゃウチが回らないこともみんなわかってる。だから……いつも感謝してるよ」

「ほんと？」

少なくとも自分はそう思っているのでパソコンから目を離さずにサイは頷いてみせる。

それを見たツユリは机の上に伸ばした腕に頬を寄せ、幸せそうに目を閉じる。

「ありがと」

「どういたしまして」

二人きりのオフィスにサイがキーをタイプする音だけが響く。

その静寂を一番聞きなれた金属音が破った。

開かれた扉から現れたのはパンツスーツ姿の女性。ベリーショート髪と冷ややかな表情からはどこかナイフを連想させる。

「ツユリ、準備ができました」

彼女の印象と同じく、覇気のある聞き取りやすい声。

「ん、わかった、ありがとうシミズ」

そこには先ほどの年相応のツユリはいない。

颯爽と立ち上がり、学校指定の枯茶色のブレザーを着る。どんだけ良質の髪なのか、ばさばさだった髪は一回撫で付けただけで元通りだ。

ツユリが玄関のシミズの後ろについたところでサイはあることに気づいた。

「コート忘れてる」

（とって）

シミズから見えない位置での口パクはどう見てもそう言っていたので、サイは仕方なく先ほどまでツユリが座っていた席にかかっていたダッフルコートを取ると玄関先まで届ける。

そこに待つツユリが両腕を広げて『着せる』と全身でものがたっていたのでしぶしぶ着せてやる。

シミズがうれしそうに鼻で笑ったのは気づいているのやら。

「では、行ってくる」

完全に仕事モードに入ったらしいツユリは振り向くことなく片手を挙げる。

「いつてらっしゃい」

サイは手を振ることなく一人きりのオフィスから二人を見送った。

道化師は仮面の底で薄く笑う。 壱

「世界がもし百人の村だったら、百人すべてが泣いている世界より、たとえ九十九人が悲しんだとしても一人が笑ってられる世界を私は望む」

報復屋ゼットー店主代理、あまみ つゆ雨海梅雨理

「お待たせして申し訳ございません」

待ち合わせに遅れたわけではないが商売上の礼儀としてツユリは侘びを入れる。

ダッフルコートを脱ぎ簡単折りたたんでから椅子を引き、それを背もたれに掛ける。傍を通った店員にコーヒーを二つ頼んでから席に着いた。

「はじめまして、報復屋ゼットー店主代理の雨海梅雨理です」

偽名は使わない。その理由はいろいろあるが、依頼者の選りすぐりをサイが担っていることが大きいだろう。

「あ……いずみ もとえ和泉素恵です」

ツユリの対面に座る待ち合わせ相手、俯いたまま名乗った女性は、発する言葉や雰囲気総じて覇気がない。ツユリたちが到着するまでに頼んだであろうコーヒーには一口もつけていない。

和泉素恵、二十歳、大学二回生、家族構成父母弟、今回の依頼ではふられた男への報復を希望。だいたいの調べはついている。

「職業柄、名刺は持ち合わせておりませんので、これを代わりに」  
枯茶色のブレザーに深緑色を基調にしたネクタイ、それと同じ柄のスカートを身にまとったツユリは少し腰を浮かせて手を差し出す。顔には笑顔を浮かべて。

素恵はその手をとるとツユリの隣に座った女性へとおずおずと視線を動かす。



「あ、こちらはシミズ、私の秘書のようなものです」  
ツユリが手を向けるとシミズは軽く会釈する。

この明らかに年上の女性を呼び捨てて自分の部下だと言う。  
「さっそくですが、契約のお話に移らせていただいてもよろしい  
でしょうか」

前のめりになり、机の上で手を組むツユリの横でシミズはA4サイズ  
の鞆からファイルを出した。

素恵の沈黙を肯定と受け取り、ツユリは話を進める。

「おおかたはネットのほうでお話ししましたが、最終的に今回の依  
頼内容は」

「殺してください」

素恵はツユリの言葉を切って、静かに言った。

「はい？」

ツユリは状況をつかめず思わず聞き返してしまう。

「殺してください」

俯いたまま素恵は語気を強めて言う。その震えた声に見えるのは、  
はつきりとした怨嗟。

「あの……ネットでお伺いした依頼内容は中川光司さんへの肉体的  
制裁のはずでしたが……」

大丈夫、こういう事態は初めてではない。心の中で自分に言い聞  
かせ己の冷静を保ち頭の中を整理しつつ依頼者の状況を確認。

「だから……」

言って、素恵は一拍置いた、次に起こることに気づいたツユリが  
場をなだめる間もなく、それは爆発した。

「殺してくださいっていつてるんです！」

素恵はなおも下を向いたまま膝の上で握った拳を震わせながら叫  
んだ。

幸いにも喫茶店の中には少し離れたところに客が一人いるだけだ  
ったが、それでも注文したコーヒーを持ってきた女性店員はツユリ  
の横で固まってしまった。

ツユリはコ店員に侘びを入れコーヒーを受け取ると、  
「うわゝなんか久しぶりにアクティブな依頼きちゃったよ」  
と、体を傾け口を手で隠し小声で隣のシミズに愚痴った。

「聞こえますよ、ツユリ」

優秀な秘書のようなものらしくシミズは涼しい口調で上司をいなす。そして鞆から電卓を出しキーを弾きだす。

「では、お値段の見積もりのほうが変わりますが……」

ツユリは横目でシミズの電卓を弾く指を確認する。

「少々お待ちください」

素恵は視線を上げないが、ツユリは再び笑みを湛えて対応する。

「こちらに」

シミズは計算が終わった電卓を向きを反転させ素恵のほうへと差し出す。

「こちらのお値段になりますが……」

ツユリが手で示した電卓を見た素恵の目が見開かれる。

「え？」

その疑問の内容をツユリは先んじて答える。

「いかに私たちがプロとはいえ現代社会において殺人というものは相等のリスクになります。当店ではリスクに見合った金額や物資をお支払いいただくシステムとなっておりますので」

言葉を切って笑顔を張りなおす。

「ご理解いただけると幸いです」

「あの……」

上目使いに合った素恵の視線はすぐに自らの拳へと戻る。

「事前にお話ししたとおり、半額を前払い、依頼を完遂し次第もう半額をお支払いしていただくかたちとなっております」

「あの……、私、そんなにお金なくて」

そんなことは解っている。これは鎌かけだ。ツユリは溜まった唾を飲み込みたい衝動を必死に堪えた。

そんなツユリの前で素恵は口の中で言葉を詰まらせる。

「物品での支払いも可能ですが」

どうにか笑顔を崩さずに言うことができた。

「いや、そういうのも……」

「では、事前の打ち合わせどおり中川光司さんへの肉体的制裁ということで」

「はい……」

頷いた素恵の返事の歯切れは悪く、

「お金はここに……」

鞆から封筒を出し、ツユリへと渡す。

受け取ったツユリはそのままシミズへと流すとシミズは封筒を開き、中身を確認する。

「たしかに」

「では、ご契約の確認を……」

ツユリの目配せにシミズは先ほどのファイルの中から一枚紙を出し、向きを合わせて素恵の前に提示する。

「和泉素恵さまのご依頼内容は和泉さまをはねつけた中川光司さんに対する肉体的制裁、期間は一週間以内」

ツユリは紙面上の文字を指で追いながら説明を続ける。

「契約において和泉さまが注意しなければならぬのは三つ」

一拍おいて、ツユリは少し語調を強めて言葉を続ける。

「一つ目、我々の行為を依頼達成のいかに関わらず、警察、その他法的機関に通報しないこと」

ツユリは紙から目を上げ、素恵が頷くのを待ってから言葉を続ける。

「二つ目、我々の依頼遂行の妨害しないこと」

素恵は小さく頷く。

「三つ目、この報復行為が感情を因るところにした実質的な利害とは無関係である純粋な復讐であること」

納得しかねるといった表情を見せる素恵にツユリは補足説明を入れる。

「つまり、あなたはこの報復によって金や地位、名誉などを得ることがあつてはいけないということです」

素恵はようやく頷く。

「これらに反した場合は上記の違約金を払っていただくことになっています。大丈夫ですか？」

素恵は頷く。

「はんこは……」

鞆の中から出されたのは印鑑ケース。ツユリはそれを手でいなし、そのままその手を差し出す。

「職業柄、印鑑というものは使用しないので代わりにこれを」

自分を捨てた相手に肉体的制裁を加える。そんな契約書に捺印を押す。そんな契約、法が認めるわけがない。

素恵は手をためらいがちに手を受け取る。これで報復屋の契約は成立した。

「では、これより依頼の実行のほうに移ります。完遂し次第ご連絡いたしますので後金はそのときに」

立ち上がると吸い付くように上げられた素恵のさびしげな視線にツユリは実行の内容を碎いて話す。

「具体的にはこれから中川光司さんの居場所を特定。それから肉体的制裁に移らせていただきます」

ツユリは誰も口をつけなかった三人分のコーヒーの伝票を手にし、ジへと歩き出す。後にシミズが続く。

「私！」

がた、音をたてて勢いよく素恵が立ち上がる。ここで振り返るのが商売というものだろう。

「どうかなさいましたか？」

「彼の場所、知ってます！」

その言葉は彼女の誠意一杯。

「情報提供感謝します」

心の中で毒づきながらも、ツユリは恭しく礼をすると、

「では外に車を待たしています。一緒に来ていただけますか？」  
彼女を外へ促した。

道化師は仮面の底で薄く笑う。 貳

殺して

和泉素恵は言った。

でも、その願いを叶えてくれた者は誰もいなかった。

何度も何度も頼んだ、しかしだめだった。

だから、報復屋に頼んだ。

ネットで見つけたゼットと呼ばれる報復屋。天からの贈り物か  
と思った。

それでも一瞬、詐欺かとも思った。しかしそれは本当に一瞬に過  
ぎなかった。

手厚い対応や説明を受けるうちに疑念は煮えた油に入れたかのよ  
うに氷解して、提示された実績やプランなどには震えを憶えた。

やっと、やっと私の願いが叶うと。

しかし、店主代理と称して待ち合わせ場所に現れたのはあきらか  
に高校生の少女。

制服を着てくる時点でふざけている。

やはり、騙されたのだろうか。

これでは私の計画は台無しではないか。

素恵は下唇を噛む。

ケータイをハンドバックからだすと発信履歴の最上段にある電話  
番号に繋ぐ。

ずいぶんと長く待たされてから相手が出た。

電話の相手は諦めたように無言だ。

「報復屋に頼んだから……」

頼りない高校生だとか騙されたかもしれないとかは関係ない、こ  
こで口に出すことに意味がある。

「もうおしまい！」

高揚した気分をおさえきれず漏らすように素恵は声を荒げる。

相手は相変わらず無言だが関係ない、全ては素恵が望む未来への布石。

結局、報復屋も素恵の願いは叶えてくれなかったことになる。

自分の願いを知るのは自分だけ。

自分の願いを判るのは自分だけ。

自分の願いを叶えられるのは自分。

通話を切る。

荒い息を整え素恵はトイレを後にする。

「計画は狂ったけど、最後は私の手で……」

呟く彼女の瞳には暗く影が宿った。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。 参

「めんどろな事になった」

ツユリは喫茶店の表で待たさせておいた八人乗りワンボックスの二列目シートへ乗り込むと現状を簡潔に報告した。

めんどろ。そうだ。

居場所と行動時間を突き止めて、後日、足の骨を一二本もらっ。

こんな気の進まない仕事はそれでおわりのはずだった。

しかし、彼女は殺せと言った。報復屋としての復讐行動は依頼人が被った損害量の関係である程度決まっている。だから彼女がどんな依頼をしようが報復屋ゼットーの行う活動は最初から決まっていた。そこに不満を持たせず依頼者の意識を誘導するのがツユリの仕事だ。

「依頼主が同行することになった」

ツユリは言葉が続ける。

様子を見る限り、彼女はもう限界だ。抑圧された願望が弾けるのに必要なのはほんの少しの起爆材か少しの衝撃。

「彼女はもう限界だ。このままでは私たちの存在が無意味になってしまう」

そう、それは報復屋の存在意義。ツユリを始めとするゼットーの夢。

「今は野放しにするより目に見えるところにおいておきたい」

爆弾を爆発しないように運ぶのはことだが見ていないところで爆発されるよりはましだ。

「で、その依頼主は？」

一通りのツユリの考えに運転席に腰掛ける壮年の男　マツはワンボックス内の成員を代表して問う。

「トイレだ」

会計の後、和泉素恵はツユリに断りを入れ、トイレへと向かった。



簡潔な答えに、マツは腕まくりしたスーツから覗く浅黒い両腕をハンドルに乗せることで頷きの代わりとする。

「どうということだ？」

その問いはツユリの後ろ、三列目のシートから。

後ろに控えたハルアキは長身瘦躯に二枚目。軟派の代表のようなその男は、二列目のシートの頭を抱きつつツユリに向かって薄ら笑いを浮かべる。

「畏かもしれないってことだ」

答えたのはマツ。

復讐依頼を装った報復屋への報復。過去にそのような事例がないわけではない。しかし、

「サイの奴がしくるとも思えないがな」

マツの言葉に一同は同意のはずだ。

サイがゼットーに加わってからはそのようなことが起こったことはない。

「とにかく今は情報がほしい」

親指を唇に押し付け、爪を噛むのを必死に我慢しながらツユリは携帯電話を取り出す。

「くそ、なんで肝心なときにサイアイツは出ないんだ」

電波は届いている。話し中ではない。だがサイは電話に出ない。

ツユリは苛立ちを隠そうとせず、携帯電話を握る手を振るわせる。  
「大丈夫」

そんなツユリの頭に後ろの席から手を乗せられる。

その手を両手でそつと握り返してツユリは振り返る手の主へと振り返る。

ハルアキの隣にちょこん、と座る小さな少女は色々な意味で人形のような。シートに散乱する長すぎる黒髪は某日本人形、その髪の間隙から見える精緻な相貌はフランス人形じみっていて、席に端座する姿とサイズはまるで少女趣味の愛玩人形のように。

「ありがとう、トウカ、でも、できるだけリスクは避けたいんだ」

トウカと呼ばれた人形のような少女は、長い髪をゆらしてカクンと頷く。

「どうすんだ」

マツの問いに迷ったのは一瞬、立ち止まることは許されない。それがゼットーを預かる者としての資格。

「このまま依頼を続行する。ハルアキ、トウカ、いけるな」

ツユリは常に最悪を考えて動いている。ハルアキとトウカを連れてきたのもそのためだ。

「おう」

ハルアキの了承。

続いてトウカもカクンと頷く。

ハンドルにもたれかかったマツの目配せに外を見ると、外に控えたシミズからの合図。

素恵が喫茶店から出てきたようだ。

ツユリは一旦外に出ると、素恵を向かい入れる。続いてシミズも助手席に乗り込む。

「ゼットーのメンバーです。後ろの二人はバイトですが皆優秀なので安心してください」

車内をきよるきよる不安げに見渡す素恵にツユリは説明を入れた。

「あの、先ほどの居場所がわかる、というのは……」

「GPSが、あの人、横着なんでまだ解約してないと思います」

膝の上で握った拳に視線を落として素恵は言う。

GPS サイに任せれば簡単だったものを…… ツユリは心の中で咄嗟しながらも笑顔を貼り付けたままこう言った。

「助かります」

ツユリの指示でマツはエンジンをかける。

報復屋ゼットーと依頼人を乗せたワンボックスは依頼達成へと走り出した。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。 肆

「私たちのこと喋っちゃいましたね」

そう判断したのは、まず人数。シミズとマツをワンボックス内に残し、中川光司なかがわ こうじの潜伏先　なんてことはない、彼は自宅のマンションに居た　に素恵の同行をしぶしぶ認め、三人を連れ立って扉を開ければそこに居たのは中川光司、と、いかにも柄の悪そうな、明らかに目つきの悪い男が三人。

「あの……すい、ません」

素恵は俯いたままぺこりと頭を下げる

「二つ目！　我々の依頼遂行の妨害しないこと！」

突然叫んだツユリに素恵はびくツと身をすくませる。

ツユリ一瞬、顔をしかめてみせて、につこりと早変わり。これぞ顔芸、ツユリの商売道具。プロの成せる業わざ。

「まあ、今回はサービスします」

判断した材料のもう一つ、これがなかったら「へえ」柄の悪いお友達がいらしゃったですね」で終わったものを、三人の男は素恵を認めるなり、唐突にバタフライナイフを展開し、敵意むき出しで突っ込んできたのだ。

「三人か……足りないな」

ツユリは酷薄に頬を歪め、上唇の端を小さく舐める。

正当防衛は報復屋の主義に反しない。

「ハルアキ！　トウカ！」

呼ばれてツユリと素恵の前に飛び出したのはトウカ。

小柄な体は狭い廊下を土足でするりと抜け、長すぎる黒髪を舞い散らし一直線に先頭の男へと向かう。

トウカはツユリと同じブレザーの背中に手突っ込むと、そこからサバイバルナイフを取り出す。

刃渡り二十五センチほどの片刃のナイフは明確に一般のサバイバ

ルナイフとは違う部分がある。

厚めに設計された刃は縦に一本、幅一センチ程の切れ込みがあり、中央で刀身を半分に分断していて。柄は先端がＴ字型に張り出している。ゼットーの技術者ミモリ手製のナイフ。名は薄紫。エンジニア  
つやむらさき

俗にソードブレイカーと呼ばれる形をとったそれは形状こそナイフに酷似しているがその本質は盾。特にトウカの持つそれは敵が持つあらゆる凶器を無効化するためだけに作られた一振り。一切の刃物をへし折り、鉄を切り裂く。しかし人を傷つけることは決してない。

そしてトウカ自身の存在もまた盾。

「あの二人、双子なんです、お姉ちゃんと弟で」

背中を見守るツヨリは世間話レベルで素恵に話しかける。

飛び出した姉は男のナイフを自分の薄紫の切れ込みにすべり込ませる。Ｔ字型の薄紫の先端を空いている手で握り、瞬間的に力を込める。薄紫を回転させて、そこで男のナイフを折った。

折られたナイフの刀身ははじけ飛び地面に突き刺さる。

「お姉ちゃんのほうは物を壊すことに長けていまして、弟のほうは

「

続いて、飛び出したのは弟、ハルアキナイフを折られ、退こうとした男に足を踏み、退路を絶ってから掌底を顎に叩き込む。バランスを崩した男は床に倒れこんだ。

相対的な筋肉量でいうならば男のほうが確実に上だろう。しかし、体重移動と腕を伸ばすタイミング、急所を見極める目、これらを駆使して人を壊すハルアキには勝てるはずもない。

「人を壊すのことに關しては右に出る物はいません。心根が真性のサドなんですよ」

言つてツヨリは素恵に笑つて見せる。対する素恵は驚きを隠さず表情にだす。

それはツヨリの言葉にではなくこの現状に対する驚きだろう。高校生の少年少女が大の男を一人、鮮やかにのしたのだ。

姉弟の進撃は止まらない。

ハルアキは次の男のナイフを持つ手を右手でいなし、臆せず、退かず、さらに一步踏み込む。

もちろん前へと出る足は、倒れた男の顔面を踏み抜くことを忘れるない。

そのまま、身をよじり顔面に向けて渾身こんしんの左ストレートを放つ。

男はハルアキの拳をボクシングのスリッピング・アウエーのように上体を反らして躲す。その死角から現れたのは三人目の男のナイフ。狙いはハルアキの右目。虚を突かれたハルアキは反応できない。しかし目を瞑ることは決してしない。

がき、という金属音。トウ力の薄紫がハルアキに迫るナイフを絡めとり宙へ弾き飛ばす。

躲されて宙を浮いたハルアキの拳は、上体を反らした男の襟首を掴み、ぐいと引き寄せる。体勢が崩れていた男の身体はいとも簡単にハルアキへと向かう。ハルアキの片足が地面を離れる。ちょうど速度の乗った男の鳩尾みぞおちに膝が決まる。

男は声も出せぬまま膝をつき、その場に崩れ落ちた。

しかし、おかしい　ツユリは妙な引つかかりを感じた。

狭い廊下のような空間での戦闘は絶妙なコンビネーションが必要とされる。それがなければただの一对一の勝ち抜き戦になってしまうからだ。そのことにおいてはハルアキとトウ力の右に出る者はいないはずだ。しかし、違和感がある。男たちの戦闘は二人の戦闘には及ばないものの決められた統率が見える。

「ツユリこいつら素人じゃない解決屋だ」  
トラブルバスター

三人目の男の胸倉を掴むとハルアキは壁に押し付けて叫んだ。

拳を交えたハルアキが一番違和感を感じていたのだろう。それに彼は何度かその手の者たちと手合わせしたことがある。

「解決屋？」

その質問は、ツユリの隣、素恵から。

「我々の同業者です」

そして、仇敵。

素恵が中川にゼットーの旨を話したのはおおかたトイレに行っていた頃だとツユリは当たりをつけていた。しかし……中川の対応は早すぎる。

ゼットーも早急に対応した。現に喫茶店を出てから一時間弱しか時間は絶っていないはずだ。

だとしたら、最初から素恵の報復<sup>ハナ</sup>を予知していた？  
分らない。情報が少なすぎる。

「おまえ、所属は？ L C V R社か？ ベゴニアか？」  
壁に押し付けたままハルアキが問う。

しかし、解決屋を始めとする報復屋の同業者たちは部下の教育だけは真面目にする。簡単に口を割るわけもない。あるいはハルアキなら可能かもしれないが今はそれが目的ではない。

ハルアキも分かっているのだろ。男が顔を背けたと見るや、膝を腹部に叩き込み昏倒させる。

「おい、お前ら！」

その声に一同が振り向く。

金髪を逆立てた髪、顔立ちは二枚目半といったところか、戦闘の蚊帳の外だった中川光司だ。

右手に握るのはトウ力が先ほど弾き飛ばしたナイフ。左手に抱くのはそのナイフを飛ばした本人、トウ力。

「武器を捨てろ、女！」

中川は黒髪を掻き分けてトウ力の首筋にナイフを当る。

トウ力は特に反応を見せず、薄紫を取り落とす。

「寄るな！ こいつがどうなってもいいのか！」

ツユリは心の中で毒吐く。通常の思考回路の持ち主なら三人の男を負かした彼女を人質にとるなどありえないだろう。あるいはそれが分からないほどに追い詰められているのかもしれない。どちらにせよ中川の行為はこの場において正解だ。

武器を持っていない人間に対してトウ力は無警戒で無力だ。

そしてトウカは人間を含むありとあらゆる生き物を傷つけることができない。

中川の持つナイフは男が持っていたものだ。それを咄嗟に拾ってトウカの首に押し当てたのだとすれば彼女が不覚をとったのも納得がいく。

動くことのできないツユリとハルアキの後ろ。ふらりと立ち上がる影が一つ。

素恵だ。手にはトウカが折ったナイフ。彼女は刃だけになったそれを強く握り締めている。掌から流れた紅い血がナイフを滴り、地面へと落ちる。

一滴、また一滴と、滴る血液に合わせて、素恵は中川へと歩を進める。

「光司……」

独白のように呟いて、素恵は虚ろな目で元彼氏を見据えた。

> i 1 2 4 2 2 — 1 4 5 7 <

トウカの武器『薄紫』

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。 伍

許せない。

素恵は憤りを覚えながら元彼氏の許へ向かう車の中で握った拳を小さく振るわせた。

それから隣のツユリの存在に気づく。

少し顎を上げ、隣に佇むツユリの表情を窺う。

そこには笑みを張り付けた大和撫子。

素恵は高校時代体型に悩んだことがあった。食事を制限して腹や二の腕の肉と戦い、体重計と睨み合う毎日。今でこそ食事と運動に素直に反応する身体になったが、心と身体が不安定な世の女子高生が少なからず一度は通る悩み。だと思っていた。

しかし、この隣の少女はどうだ？

そこそこの身長、しなやかな黒髪、すらつとした長い手足。それでいて決して痩せすぎではない健康的な肉体美。

そして、見る者をはっとさせる端正な顔立ち。若干の幼さの残る相貌は可愛さと美しさの黄金比を取ったように見る者を惹く。

そこまでの素材は誰もがうらやむものだ。

しかし、報復屋。

なぜ、こんな少女が？

素恵は頭のなかでツユリという人間の背景を数パターンつくる。

だが、どれも答えからは程遠い気がした。

すべるように<sup>まなこ</sup>に移動したツユリの目と素恵の視線が交錯した。

ツユリは容態を窺うようにやさしく素恵を覗き込む。

見られただろうか？ 怪しまれただろうか？ そんな疑念が浮かんだが、先ほどの喫茶店でのことを思い出し、今さらどうしようもないということを悟り、再び視線を膝に握った拳に落とした。

これから、報復に向かうのだ。

許せないあの男に会う。



許せない。

私の、願いを一度も聞いてくれなかった。  
許せない。

私の、ことを袖にして他の女に乗り換えた。

許せない。

私が、警告したにもかかわらずまだ自宅で悠然と過ごしている。  
許せない許せない許せない。

報復屋の少女は車に残るように言ったが、素恵が頼むとあっさり承諾してくれた。

ツユリは先ほど紹介されたバイトの男女と一緒にオートロックを何故かパスワードで抜け、エレベーターに乗り込む。

素恵は同乗した男女を横目で見る。

黒髪の少女は割と小柄な素恵よりさらに小さく伸びすぎの黒髪は目元どころか顔のほとんどを覆ってしまっている。しかし髪のすきまから見えた顔立ちは人形のように整っていてツユリとはまた別の美しさを感じた。

百八十に近い身長と二枚目代表のような容貌をもつ男のほうは軽薄な笑みを絶やさず腕を組みエレベーターの壁に背をあずけている。ツユリは迷わず五階のボタンを押した。素恵は何も教えていないのに。

駅から程近いこのマンションの五階。素恵が何度も通ったことのある彼の自宅だ。大学生に不相応な家賃のそこは親のすねかじりの体現。

これから彼と久しぶりに顔を合わせることになる。

素恵は、三人に気づかれないように静かに小さく溜息をついた。しかし、出迎えは中川光司ではなく、見知らぬ男三人による手荒なものだった。

姉弟と紹介された二人は三人の男をいとも簡単にのしとみせた。だが、そこからが悪い。

あるうことか、光司は報復屋の少女を人質にとったのだ。

許せない。

何故……。

許せない

何故、その腕に抱かれて<sup>いだ</sup>いるのが私ではないのだ。

何故、そこに居るのは報復屋の少女なんだ。

素恵は折られて突き刺さったナイフを握り地面から引き抜く。

肉が手のひらから削げる感覚がした。

怒りのせいか不思議と痛みはない。

「光司……」

素恵は光司を見据える。そして、ゆらりゆらりと間合いを詰める。

「く、るなあ！」

唾液を派手に飛ばして、光司が叫ぶ。

まるでその言葉が聞こえていないかのように素恵の歩みは止まらない。

ナイフを振りかざす。

狙いは光司の腕の中の報復屋、トウカ。

「うっ」

しかし、ナイフは彼女には届かず。弾き飛ばされる。

衝撃でさらに手のひらが裂け、血が溢れ出す。

「あ、ああ……」

途端に込み上げてきた痛み<sup>に</sup>素恵は呻きを漏らす。

ああ、違う。

私はこんなことをするためにここに来たのではない。

「私は……」

素恵は身を翻すと窓を開け、ゴミが積まれたベランダに出る。

背後で騒ぐ音は素恵の耳にはもう届かない。

頼りない足場。踏みしめるとつぶれるポリ袋をよじ登り、転落防

止用の手すりに手をかけた。

それでも素恵の歩みは止まらず、手すりに今度は足をかけ、その上に立った。両手を広げ、危なげにふらつきながら振り向く。見つ

める先には中川光司。

そして表情は怒りから微笑へと。

「光司、私もう待てないから」

ああ、やっと私の願いが叶う。

足が手すりから離れ、素恵のからだがふわりと浮く。

「ばいばい」

そして、彼女は空に消えた。

道化師は仮面の底で薄く笑う。陸

中川光司の幸運はトウカを人質にとったこと。

彼女ならたとえ自分が生命の危険にさらされようともあらゆる武器攻撃を完封できる。

素恵の手のひらで閃いたナイフまっすぐトウカへと向かわず、興奮気味の素恵は中川の顔面へとナイフを滑らす。しかし、光司の目前でトウカの振り上げた足に阻まれた。

ナイフの切っ先はトウカの靴底の踏み抜き防止鉄板に当たり、ぎり、と金属を掻く音を出して弾き飛ばされる。

「あ、ああ……」

広がった傷口から溢れる鮮血を見て素恵は呻きを漏らす。

その奥で慄いた中川がトウカの拘束を弛める。

その一瞬をツユリは見逃さない。

「ハルアキ！ トウカを」

確保しろ。

次の言葉は出なかった。

ツユリの影で呆然と立ち尽くすハルアキ。

（そうか……）

ツユリは齒を食いしばる。

中川光司の幸運はトウカを人質にとったこと。

彼女を人質にとることにより、ゼットーの主戦力であるハルアキを無力化できる。

まるで狙ったかのように続く不幸に成すすべもなく、ツユリはただ場の緊張に身体を強張らせる。

瞬間。ツユリの耳によく聴き慣れた音楽が響いた。突然鳴り響いた音に肩をびくつかせる。それが自分の携帯電話の着信音だと気づくのに二秒要した。

トッカータとフーガ二短調。最近は無沙汰だったが忘れること

はない、サイからの着信だ。しかし、この状況で出れるわけがない。  
「おい、素恵、やめろ！」

中川の戦慄を含んだ叫びにツユリは視線を上げる。  
見れば依頼人はポリ袋が敷き詰められたベランダでゴミを足場にしながら手すりへと昇っている。

「素恵！　なあ、帰ってこいよ」

中川はトウカにナイフを当てたまま説得を続ける。

素恵は手すりの上に立つと振り返って言った。

「光司、もう待てないから……」

その言葉は微笑みとともに。

夕日を背に立つ彼女は全てを悟ったように。

「な、なあ、考え直そう、素恵」

ついに中川はトウカを放し、ナイフを捨て、両手を広げて一歩、相手の出方を窺うように慎重に近づく。しかし懇願は虚しく素恵の双眸は閉じられる。

「ばいばい」

言うが早いか素恵の身体はゆっくりと空に円を描くように後ろ向きに倒れる。

「うわああああああ！」

男の叫び、それは鼓舞であり恐怖を消し、勇気を振り絞る道具。

飛び出したのは三つの影。

先頭を切るのは中川光司、素恵の一番近くに居たかれはいち早く反応し、ゴミ山に足が沈むより早くポリ袋の上を駆け素恵の後に続き空へと飛び立つ。

「おいおい」

続くハルアキも一つ飛びに手すりに足をかけ空へ、空中で素恵を抱きしめるようにして捕まえた中川の足首を右手で捕らえる。そして左手を手すりへと伸ばす。身長も高くそれに加え手足も長いハルアキにとってこの距離で手すりを捕らえるのは容易であった。

捉えた右手の先の二人は重力の成すまま落下する。

伸びきったハルアキの身体に二人の全体重の衝撃がかかる。

「っ」

かくん、と三人の動きは一瞬停止し、そしてまた動き出した。衝撃に耐えられずハルアキの左手が手すりからはずれてしまったのだ。

三人は重力に従うまま地面に向かう。ハルアキの左手はどこか捕まる場所を探して彷徨う。

その左手が温かい何かに包まれる

始終を見守っていたツユリは先ほどから鳴り続けていた携帯をとると通話ボタンを押し耳にかざす。

相手も耳にかざすのを待ってから、ツユリは話し始めた。

「もしもし？」

『もしもし』

相手の声には少なからず怒りが含まれている。

そんなことは歯牙にもかかけずツユリは通話を続ける。

「あゝ、何にか用だった？」

『まあな』

今度は少し息が荒い。苦しそうだ。

「けっこう急ぎ？」

『今回の依頼件で、依頼者の情報だったんだけど、もう必要ないみたいだ』

「一応、訊かせて」

『まあ、依頼人のことを少し訊き込んで、依頼人のブログを見つけたんだけど……後でいい？』

「おー、ご苦労だったね」

心から漏れ出すサディズムに対する興奮を隠すことなく、ツユリは声を若干弾ませる。

『あゝ、もう切っていい？』

「なんで？」

ツユリは笑いを堪えた。サイは電話の向こうで溜息を小さくつく。  
『片手で三人を支えるのは限界なんですけど』

ほらさっさとあがれハルアキ、と電話の向こうで会話が続く。  
飛び出した三人の影の最後の一人、それはサイだった。

玄関の扉を開くと、まるでこうなることを予知していたかのように  
一目散にベランダへ駆け寄り、手すり越しにハルアキの手を捕ま  
えた。

「ご苦労様」

ツユリは三人を引き上げ、リビングへと戻ったサイに労いを投げ  
かける。

「誰かさんのせいで余計な労働をしてしまった気がする」

解放されて床にへたりこんだトウカに手を貸しながら、サイはぼ  
やく。

「お手柄だったなサイ」

微笑みながらツユリにそう言われたサイは大きく溜息を吐く。い  
や、と頭を振り、

「今回は俺のミスだ」

サイは携帯を開き、目当てのサイトを開くと画面をツユリのほう  
に向け掲げる。

「これは？」

ツユリの問いにサイはベランダに引き上げた三人をを横目で見る。  
ハルアキは具合を確認するように肩をぐるぐる回しこちらに向か  
つてくる。

和泉素恵と中川光司はなにやらその場に座り込んで抱き合ってい  
た。

素恵と中川の注意がこちらに向いてないことを確認してから、サ  
イは少し音量を抑えて喋りだす。

「和泉素恵のブログ」

ツユリが覗く素恵のブログには『殴って』から始まり『殺して』  
に終わるあらゆる陵辱を渴望する文字が躍っていた。

目を細め画面を追うツユリにサイは続ける。

「DV願望だって」

言葉は顔を上げたツユリの目を見てから、

「ブログだけじゃ確信できなくて……演技してる可能性も捨てられないから和泉さんの大学まで聞き込みしてきた。そしたら友達間では結構評判らしくて」

サイはツユリに向き直り頭を下げる。

「申し訳ございませんでした。俺のミスです」

電話に出れないくらい焦ってた、と付け足す。

「でもおまえは自分で収拾をつけた」

サイのから空きの後頭部へ、ツユリは軽くゲンコツを一発。

「それでいい」

さて、とツユリは腰に手をあてる。

「あとは、あれだな」

言ってツユリが指差した先はゴミ溜めで抱き合う、というより中川が一方的に抱きしめている形の二人。

「落ち着いたか」

宥めるように背中を撫でる手は優しく、中川は素恵の耳元でささやいた。素恵は無言で頷く。

「じゃあ」

「あのー、おじゃまします」

中川の言葉を遮ったのはツユリ、空気が読めないのではなく、あえての突入だ。

「落ち着きましたか？」

ツユリは聞いていたのであえて中川と同じ言葉で対話の口火を切る。

素恵は首だけでツユリのほうを向き、小さく頷いた。

続けて、ツユリが依頼の件を話そうとすると、

ぶわ、と素恵は涙を流し始めた。



とめどなく溢れる涙は頤をつたい中川の肩に染みをつくる。

「こわかった」

震える声でそう言っていると、いっそう涙を溢れさせ、素恵は中川の胸に顔をうずめてしまった。

「あの、報復屋の方ですよ」

代わりに口を開いたのは中川光司。ツユリが頷くと言葉を続ける。  
「お代は僕がお支払いするんで、今はそっとしておいてもらえませんか？」

ここで笑顔で頷けない者は商人でないだろう。

「はい」

そう言ったツユリの笑顔は若干、微量、ホントにほんのりと少しだけ引きつっていた。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。漆

一応依頼終了ということと相成り、報復屋ゼットー一行はワンボックスに乗り込み、事務所へ向けて走行中だった。

「へえ、世の中には変わった奴もいるもんだ」

それは、事件の顛末をツヨリから聞いた運転手、マツの感想。自分たちのことを棚どころか屋根に上げての意見である。

「おそらく。でも上手いくんじゃない？ あの人。あの娘も心の底から暴力なんて望んでたわけじゃないだろうし」

「なんでわかる？」

バクミラー越しにツヨリの表情を窺いつつマツは問う。

「じゃなかったらあそこで泣かないでしょう」

ツヨリはなかなか投げやりな態度で言いやる。正直イレギュラーすぎる今回の一件に、疲れたのだ。

「でも、男にはもう新しい女が居るんじゃないか？」

ハルアキが三列目から身を乗り出しツヨリに問う。

「あれは、中川が解決屋に依頼をしてる電話を彼女が勝手に勘違いしたらしい」

「どこをどうやってたら勘違いするんだか」

手で払いながら答えると、ハルアキはおとなしく席に着く。勢いよくシートに着いたので隣に座るトウカの小柄な身体が少し浮いた。「で、結局俺が死にかけたのは……お前の所為か！」

ハルアキは再び腰を浮かすと二列目で小さくなっていたサイの首を絞めにかかる。

「でも珍しいなサイがしくるなんて」

マツの問いにハルアキに喉を押さえられているため返答できないサイは左手を伸ばし震えながら何故か親指を立てた。

バクミラー越しにそれを確認したマツはけたけたと笑う。

助手席のシミズもくすりと小さく笑った。

「我々が扱う商品は感情だ。それはとても繊細ででたらめなものだから行動の果てに起こる結末は我々にはおるか依頼者にすらわからない」

窓ガラスに頭を預け、空ろな瞳で外の景色を眺めていたツユリがぼそりと呟いた言葉に、一瞬、車内の時間が止まる。

「それ、ゼットーの受け売りだろ」

時を動かしたのはハルアキの手からなんとか逃れたサイ。

「ばれたか」

ツユリは頭の位置を動かさずに目だけでサイを見て、べっ、と舌をだす。

そして少女は薄く笑う。自嘲するように。夜を嘆くように。全てを悟ったように。

吹きすさぶビル風を切り裂いて、ゼットー一行を乗せた車は陽が沈んだ街を静かに走り抜けた。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。 漆（後書き）

道化師は仮面の底で薄く笑う。これにて了です。

ありがとうございますm（――）m

余談ですが、

この物語の主人公は実はサイです。

今、驚かれた方も多いと思います。ここまでの話で、奇跡的に出席率の少ない主人公ですから。留年ぎりぎりです。

では、ツユリは？

ヒロイン……ではありません。

ツユリもまたこの物語の主人公なのです。

これは消炭の心の問題かもしれませんが、

ツユリは物語におけるトリガーや小道具的な立ち位置に収まるのではなく、

心の葛藤や成長を描いていけたらなと思っています。

だから、この物語には二人の主人公がいるのです。

なので、ツユリには”魅力”ではなく”人間”を感じてもらえたら  
な、なんて思っています。

非常に生意気なこと言ってますいませんでした。

では、ヒロインは？

……トウカ、ですかね。あと依頼人の女の子たちとか。ゼットーメンツではあと一人女の子（？）が登場する予定です。

人形は啼かない。噫

「他人を……恨む？ そんなことより私、消えてなくなりたい」

報復屋ゼットー戦闘員、敷冬夏しきとうか

「おまえな、だから、いつも詰が甘いつて言ってるだろ」

報復屋ゼットーのオフィスにはツユリの説教がねちねちと響いていた。

「あの！」

びし！ と効果音がつきそうなほど優等生よろしく手を挙げたのは、その説教の矛先であるハルアキ。

ツユリは「ああ？」と時代錯誤の不良学生よろしくこめかみをひくつかせながら発言を認める。

「なんだ？」

「正座したほうがいいですか？」

ハルアキは怒られていることをまったく理解していないかのよう  
に意味深なことをのたまう。

「おまえがシバかれるのもいけるくちだなんて知らなかったよ」

ツユリの形のいい眉が勢いよくつりあがる。キレる寸前だ。

「そりやもうツユリみたいな美少女だったらいつでも」

ぶち。

「ひっ」

何かが切れる音の後に続いたのは、少し離れたところで二人のやり取りを見守っていたトウカの悲鳴。

トウカは床に座り、身を潜め、引き出したライムグリーンのオフ  
イスチェアに身を隠す。視線は全く隠せていない精神的防壁の後ろ  
でトウカはわなわなと小動物よろしく震えていた。

「ただいま」

ドアが開け放たれると同時に発された言葉はトウカには救世主だったが、本人には最悪のタイミングだった。

「ぎら、とツユリにとばっちり気味に睨まれ、サイはドアノブを後ろ手に身を堅くする。」

「ご苦労」

「まいど」

言葉にまったく真心がこもっていない労いに、サイはとりあえず、キャッチボールになっていない言葉を返ししながら左手につながれた紐を引っ張る。

「サイ！」

控えめに声を上げ、とて、とトウカは小走りに近づく、サイの後ろに身を隠し、今度は完全に恐怖の発信源である二名を視界から消すことに成功した。が、

「きやつ」

短い悲鳴をあげ、床に押し倒される。

トウカは自分を押して倒した相手を確認する。サイの左手から伸びる紐に繋がれたそいつは 白黒の滑らかに伸びた毛並み。長く遅い尻尾。狼を連想させるその身体 シベリアン・ハスキー。名前の通りシベリア原産の大型犬だ。

「こら、龍之介！」

サイが紐を引いて制すと、龍之介と呼ばれたシベリアン・ハスキーは今度はサイに向かって飛びついた。

龍之介からすればじゃれてるでけなのだろうがサイズがサイズだけにシヤレになるレベルの突進じゃない。さすがのサイも半歩よける。

「問題はなかったか？」

言葉とは裏腹に欠片も心配した様子を含めず、ツユリは問う。

「いや？ 別に」

サイは龍之介の首元をわしよわしよしながら顔を向けずに答える。  
「何？ 今回の依頼」

業務報告に疑問をはさんだのは、すでに正座状態のハルアキ。

「おまえは本当に何も聞いてないんだな」

ツユリは呆れきった様子で溜息を一つ、言葉を続ける。

「今回の依頼は隣家の騒音被害への報復としてその家の愛犬を誘拐」

「ま、一週間くらい預かるだけだけだな」

ちょうど龍之介をお座りさせたサイが補足説明。

「今回はサイが適任だったからな、一人でやってもらった」

家主のスケジュール把握にピッキング技術。現場に痕跡を残さない慎重な作業。いずれもこのゼットー内においてサイの右に出る者はいない。もはや天職の領域に至る今回の依頼はサイ以外の人選はありえなかった。

「ミモリとマツも出張中だし」

「またもサイが補足説明。」

「きやつ」

サイが話に集中を分断した隙を狙って龍之介がまたトウ力に飛びついた。

「なつかれてやんの」

「そ、そんなことない！」

ハルアキの茶々入れを否定しつつトウ力は龍之介の下でもがく。

しかし、小柄なトウ力には体重差のせいで這い出ることはできない。それどころか龍之介はトウ力の顔をべろべろ舐め始めた。

「やっぱり懐かれてる」

言って、ハルアキは心底面白そうにからからと笑う。

「なんで懐かれるか教えてやろうか？」

ハルアキの悪ノリに便乗してサイもいたずら心を働かせる。龍之介を抑え、トウ力を救出しつつ、こくこくと何度も首を縦に振るトウ力を起こしてから答えを返す。

「それはな……」

サイは言葉を切って少し悪そうな笑み。

トウカは答えを待つように長すぎる前髪から無垢な瞳を覗かせてサイを見上げる。

「このあいだミヤギにこっそり動物に好かれる呪いをかけておいてもらったのだー」

雰囲気に乗せられてトウカ自身もなんだか分からない恐怖に、トウカは目をぎゅーっと閉じてぶんぶんと首を振る。

「あんまり、トウカをイヂめるな、そんなことないぞ、龍之介は誰にでもやさしいんだよな」

助け舟とばかりにツユリは男二人を諫める。龍之介の前にしゃがみこむとサイが先ほどやっていたように首の下を撫でようとした。かぶ

ツユリの笑顔が固まる。

次いでオフィス内に響くハルアキの大笑い。

龍之介がツユリの差し出した手に噛み付いたのだ。

無論あまがみなのだが、龍之介は加えていた手を解放するとつまらなそうに鼻を鳴らし、そつばを向いた。

「動物はいい人か分かるんだよ、ほら、わん公、こっちこい」

言いいつつ、笑いすぎて涙目のハルアキは手招きする。

龍之介はそれに弾かれたように反応するとハルアキの前まで駆け寄り、

ガプ

「痛ってー!」

情けない絶叫。

今度は笑う者はいなかった。

「動物はいい人か分かるんだよな」

再び自らの許に帰ってきた龍之介をわしよわししながら龍之介にサイは話しかける。

龍之介はその言葉に答えるようにサイの顔をベロベロ舐めまわす。そして、しなければいいのに、その龍之介の背中をトウカがおそるおそる撫でた。そのときだった。



龍之介は身体をよじってその場で華麗なターンをきめ、再びトウ力を押し倒す。

トウ力がもかくもやはり脱出は不可能だった。

「うう」

龍之介の下で力なく呻く。もはやどうしようもない。

ずり、と暴れていたトウ力の小柄な身体が引き抜かれる。

ハルアキがトウ力を引きずり出したのだ。

そのままトウ力の脇を捕まえて立ち上げる。

乱れた服を整えるトウ力の横で噛まれた手をさすりつつハルアキは言った。

「じゃあ、もう遅いし、俺たち帰るわ、お疲れ様」

「お疲れ様」

噛まれた手を抑ええながら退出する弟。姉もひよこひよこことその後続いた。

## 人形は啼かない。弐

家族四人で遊園地に行った。

姉は相変わらず無邪気にはしゃいで、弟も相変わらず姉にべったりで、でも父と母はそんな二人の背中を見ても微笑みを見せず、ただ地面を見下ろして淡々と何かを話し合っていた。

それが、トウカの記憶の中で一番古いハルアキの記憶。

そして、トウカの記憶の中で唯一の父の記憶。

父の訃報を聞いたのは桜の木が青々と葉をつけた頃。

入学して間もなく、といってもトウカが存在がクラスで浮き始めるには十分な時間だった。

中学時代「顔が気に入らない」とクラスの女子たちからいじめに遭った。なんてことはない男子の気を惹いてやまないトウカの容姿に対する可愛い嫉妬だったのだが、鈍感に加え、当時から人との摩擦を避ける傾向にあったトウカはその言葉を真に受け、髪を伸ばし始めた。伸ばしたことによって母親の口からは「顔は出したほうが可愛いのに……」なんて言葉も漏れたが、もともとトウカは自分の容姿には興味がなかったし、気を惹きたい異性がいるわけでもなかったので正直、どうでもよかったのだ。

晴れてトウカに降りかかるいじめは消え、事なかれ主義のトウカとしては穏やかな日常が戻ったことに安堵した。

同時に、トウカに寄り付く人間も消え失せた。元とはいえないじめの対象だったことやその奇異な容姿が影響してクラスメイトたちはだんだんとトウカを敬遠するようになっていった。

そして、元から口数の多いほうではなく落ち着いた気性だったトウカは生活においてほとんど言葉を発する機会が消滅した。

高校に入学してもそれは変わらなかった。入学初日の自己紹介でもほとんどの生徒がトウカの異様な容姿を奇異の目で見つめた。普

段の生活も変わらない。周りの人間と打ち解けるなんてことは夢のまた夢、大量の水に落とされた一滴の油のようにトウ力はクラスから浮いていった。

そんなときだった。父が死んだ。と父の父、トウ力の祖父から母親宛に連絡が入ったのは。

受話器を手にしたまま地面に崩れ落ち、声なく泣いた母をトウ力は今でも覚えている。

父との記憶など皆無だったトウ力は泣けなかった。ただ、心の底で大切なものが壊れゆく感覚は初めてではなかった。

父の実家で行われた葬式には母と二人で出向いた。親類縁者のほとんどが集まり、トウ力の父は多くの人に見守られてこの世を旅立った。

そのときトウ力は両親が離婚してから初めて父方の祖父母に会った。祖母はトウ力の髪を左右に分け、顔をさらけ出すと「息子の面影がある」と口にした。祖父は腕を組み黙ってそんな二人を見つめていた。

トウ力は父に引き取られた弟、ハルアキの姿を探したが、結局そのときに会うことはなかった。

十年ぶりの弟との再会は唐突だった。セミの鳴き声が街中に響きわたるようになった初夏のころ。

「木瀬津春秋きせつ はるあきです。よろしくお願いします」

ハルアキはトウ力のクラスメイトとして現れたのだ。

ありきたりな自己紹介に教室中は主に黄色くざわめく。

その原因は主に容姿。ぶっちゃけハルアキの容姿の良さにクラス中の女子は浮き足立ったのだ。

曰く付きのイケメン転校生がクラス中どこるか校内をも巻き込んで問題を起こしたのはまた別の話である。

ここでの問題はそこからだった。一回目の席替え以来トウ力の定位置だった窓際最後尾、その隣の席が転入生のハルアキにあてがわれたのだが、ハルアキは自分の席をスルーしてトウ力に近寄ると。

中腰になってトウカに顔を近づけた。

「うゝむ」

と唸りをあげ、トウカをまじまじと観察しつつ顎に指をあて考え込む。

視線に耐え切れずトウカはガクガクとした動作で顔を背ける。

そして何を思ったのか、ハルアキは自然な手つきでトウカの小さな頭を、がし、と掴むと、正面を向かせ、ぺろ、とその長すぎる前髪をめくったのだ。

トウカの素顔を見たときのハルアキの表情の代わり映えといったら、つぼみが一瞬で花咲くようなそんなありえなさだった。

しかし、次に発した言葉のほうもつとありえなかった。

「ねえ、君、かわいいね、彼氏とかいるの？　よかったら俺と付き合わない？」

かちり、と音を立てて、トウカの体内時間は止まった。

午前の授業が終わり、昼休みに入るなり、ハルアキはまたしてもトウカの席に近づいてきた。

そして、クラス中に奔った緊張と不自然な静けさをよそに話しかけてきた。

「ねえ君、名前はなんていうの？　さっきからずっと見てたけどなかなか笑わないね、現国の先生あんなに面白いこと言ってたのに、少しは笑ってあげないと、あの先生、更にハゲちゃうよ？」

机の上に母お手製の弁当を広げていたトウカは、一瞬横目でハルアキの姿を確認。無視を決め込みまたカクカクと首を捻って顔を背ける。

しかし、ぱし、と、今度は両手で頭を挟まれるとまたしても正面を向かされてしまった。

トウカの目の前には弟の満面の笑み。端正な顔立ちはたしかに女子ウケがいい。

「そんなことより、俺は君が笑ってくれたらうれしいな？」

普通の人ならその二枚目な微笑みにつられて笑ってしまっただろう。

しかしトウカは笑わなかった。

というか笑えなかった。状況が。

ただでさえ人との接触を断ってきたのに、いきなり告白。しかも初対面の転入生に。しかも本人は気づいてないだろうが弟に。しかも歯が浮くせりふを恥ずかしげもなく吐いてくる。

耐えることは得意なほうだったが、さすがのトウカもこのときばかりは痺れを切らした。

がた、と音を立てて立ち上がると、トウカは自分の頭をホールドしていたハルアキの左腕をがっちり掴む。

そのまま引つ張って教室を飛び出した。

「何処行くの？」

あくまでやんわりと疑問を投げかけるハルアキを無視しつつトウカはつかつかと歩を進める。

終着点は体育館裏。

ここなら、人目につくことはない。

トウカはハルアキを見据える。制服の内ポケットをまさぐるとそこから学生証を出した。

それをどこぞの副將軍の印籠のようにハルアキの前に掲げる。

ははぁー、という土下座の代わりに、

「お、やっぱり可愛い。でも直に見たいな」

おかしい。ハルアキのリアクションが予想の斜め上だ。

訝ってトウカは自分で学生証を見してみる。

中学の、それも三年の中ごろにとった本人証明の写真はトウカが髪を伸ばして間もない（伸ばす前も、もともと長かったのだが）ころのものだ。そこにはカメラに向かって微笑んでしまってるトウカがいた。

これを見て、ハルアキはトウカが自分の笑顔を見せるために体育館裏に連れてきたと思ったのだろう。

が、トウカの本当の目的は違う。

トウカはもう一回ハルアキに学生証を掲げなおすと、目的を強調するため、学生証の一部 生徒の名前の欄を指差す。

身長差があるため、ハルアキは腰を折って学生証に見入ると、その名前を読み上げた。

「敷……冬夏？」

かくかく、とトウカは何度も頷く

「冬夏？」

かくかく。

「えっと……姉貴？」

ハルアキはまだ半信半疑といったふうに関顔をそらし、後ろ頭を掻きながら姉に問う。

そんな弟に向かってトウカは力強くカクと頷く。

「うそ？」

けっこうなさない声がハルアキの口から漏れた。

かくり、とトウカは頷く。

「え？ あれ？ だって、姉ちゃん俺より大きかったじゃん？」

錯乱したハルアキは意味不明なことを言い出した。

完全に自分の身長が百八十近いことを完全に忘れた発言である。

ハルアキ頭を抱えうずくまる。そのまま『考える人』を超えるクオリティでうーんうーんとうなされ始めた。

そして、こて、と糸が切れた人形のようにその場に倒れこんだ。

こうして姉弟は十年ぶりに本当の再会を果たした。

曰くのイケメン転入生が転入初日に気絶して保健室に運ばれた真実を知る者は少ない。

## 人形は啼かない。参

陽は傾き、窓から差し込む橙色の光は少女の横顔を照らす。

ふと、少女の意識は微睡まどろみから引き上げられる。

どうやらいつの間にか眠っていたらしいトウ力かは腕から顔をあげ、身体を起こす。

机で寝たにも関わらず不思議と眠気や独特な疲れは残っていない。それとも、夢のせいだろうか。

昔の夢を見た。一年半前、ハルアキと再会した頃の夢。

報復屋と出会ってなかったころの話だ。

結局、その後、あの事件でトウ力の危惧したようないじめは起こらず、それどころか転入生をシメ上げたとして、いつかの間、時の人として怖れられるハメになった。

思い出し、トウ力は思わず口元を緩める。いわゆる思い出し笑いとうやつだ。

椅子を引いて立ち上がると、背中にかかっていたらしいジャケットが床に落ちた。

寝ていたトウ力に誰かが掛けてくれたらしいそれを慌てて拾い上げ、トウ力は首を傾げてやさしさをくれた人物を特定する。暇もなく、

「起きた？」

声を掛けられた。

声の主はサイ。斜向いのデスクでパソコンをいじっていた。

びっくりしてトウ力は周りをきよきよ見渡す。

どうやらオフィス内にはサイとトウ力しかないらしい。

もしかしたら今の一人笑いを見られたかもしれない。と推量。ト

ウ力は顔を赤くする。

「どうした？」

それを訝ったサイは心配そうにトウ力の顔を覗き込む。

トウカは首をぶんぶん横に振って問題ないことをアピールする。  
「なら、いいんだけど……。俺、今からこいつ返しに出かけてくるから留守番頼める？」

言ってサイは龍之介のリードを引っ張る。  
シベリアンハスキー

こくこく、とトウカは頷く。

思えばトウカにとつては散々な一週間だった。オフィスに出勤するたび飛びつかれ押し倒され舐めまわされ……。

しかし、龍之介が嫌いなわけではないトウカは少し寂しくなっ  
てしゅんとうなだれる。

「誘拐しといてなんだけど、ほら、お別れ」

「でも……」

龍之介はサイがリードを持ってなかったら今にもトウカに飛びつきそうな勢いだ。

「大丈夫、ツユリとかハルアキみたいに嫌われてないから」

こく、とためらいがちにトウカは頷く。

「離すぞ」

こく。

サイは龍之介のリードを離した。龍之介もそれをまっていたかの  
ようにトウカに飛びつく。

トウカもだてに一週間飛びつかれ続けたわけではない、龍之介が  
迫ってくる前に、背を向け走って逃げた。

「おいおい」

トウカと龍之介はオフィス内をぐるっと一周追いかけてこしてふ  
たたびサイの許へと帰ってきた。

トウカはさつとサイの背中影に隠れる。

「待て！」

迫ってきた龍之介を手で制すと、サイは再びリードを握った。そ  
してトウカへと向き直る。

「大丈夫だって、龍之介はトウカと遊びただけだから」

言って、サイは龍之介のリードをトウカに渡す。



「でも……」

トウカは言いよどむ。しかしサイの目を見て決心したように、こくりと頷いた。

拘束が解かれた龍之介は再びトウカに飛びかかるうとする。

「ま、待て！」

先ほどサイがやったようにトウカも手を前に出して、龍之介を止めようとする。

すると、龍之介はおとなしくその場で止まった。

長すぎる前髪の下で目を丸くするトウカに、

「言っただろ？」

サイの得意げな笑み。

「お座り」

今度は声を張り上げずにトウカは言う。

言葉に従って、龍之介は素直にお座りをした。

トウカはそんな龍之介の前に膝をつくと首に手を回し抱きしめる。そしてサイがいつもやってたようにわしよわしよした。

「ばいばい」

いつてトウカは俯く。

「ありがと」

その言葉はサイに向けて。

サイは笑顔のまま軽く顎をひく。

「じゃあ、準備してくるから、面倒みてて」

トウカの返事をまだずサイはオフィスの倉庫部屋へと消えていった。

龍之介の頭を撫で、立ち上がる。そこで、トウカは自分のデスクの上においてある小さな箱を見つけた。

プレゼント用の包装が施されている小さな箱。その緑色のリボンと箱の間に紙が挟まっている。

いぶかしみながらもトウカはその紙を抜き取り広げてみる、小さな紙だったが丁寧に蠟で封がされており、紙自体も普段使っている

紙ではなく高級紙だったので、もしかしたら開けてはいけないものかとも思ったが、紙の端にt o T o k aとインク字で書いてあったのでトウカは開けてみることにした。

内容は、トウカ宛の手紙だった。

『ハッピーバースデー冬夏 俺は君が笑ってくれたらうれしいな』  
小さな紙なので一言だけ。差出人不明ということになっているがもろバレである。

ばかな弟、とトウカは姉の顔でうれしそうに表情をゆるめる。

箱のほうも丁寧に開けていく、中身はヘアピンだった。うす紅色の睡蓮をあしらった地味でもなく派手でもなく、選んだ者のセンスの良さが窺える一品。

笑顔、なんて人前では見せることなんてここ最近ない。先ほどサイに見られてしまった思い出し笑いはノーカンである。

少なくともハルアキの前で笑ってあげられたことなんてなかった。いじめに遭い孤立していたときのようには笑えないわけではない。髪を伸ばす理由もなくなったし、心を許せる多くの仲間もできた。ただ、人前で笑顔をみせるには、心が凍てついていた時間が長すぎた。それを溶かすのにはたとえ太陽でも多くの時間がかかってしまう。

それと、単純に恥ずかしいという気持ちもあった。あるいはそちらのほうが大きいかもしれない。

どちらにせよ、自然に笑えるにはまだまだ時間が必要そうだ。

「……」

数瞬の間、トウカはヘアピンとにらめっこする。

すると何かを決心したようにヘアピンを手にすると、以前ツヨリから「トウカも鏡くらい持て」言われ、もらってそのままにしていた手鏡をデスクの引き出しから出す。

長すぎる前髪を左側に流すとヘアピンで止める。慣れてないので少し不恰好になってしまったが、そこはアクセサリのセンスの良さでカバー。どうにか、素顔をさらけ出すことに成功する。

そしてここからが肝心。

一連の動作をお利口に不思議そうに見上げていた龍之介へと向き直ると、にー、と自分が出せる精一杯の笑顔で笑って見せる。

その笑顔はまったく違和感などなく、それどころか、人形のように端正なトウカが無邪気に笑うという二つの相反する要素がまた違う魅力を引き立てる。その容貌はまさに鬼に金棒。なるほど同姓から嫉妬を買うのも理解できる。もはや罪の領域の所業であった。

「なにやってんの？」

後ろからかかったサイの声に慌ててツユリはヘアピンを取ってサイに向き直る。

「龍之介、もういいか？」

こくこく、と激しく何度もトウカは頷く。後ろ手にヘアピンを隠して。

「じゃ、行ってきます」

一人と一匹の足音が完全に遠のいたのを確認して、トウカは大事そうにヘアピンをもとあつた箱にしまう。

「あ」

嬉しさでいっぱいの中、トウカの心の中に引っかかるところが一つ。

トウカは何故か、双子の弟が自分も今日が誕生日だということを忘れていた気がした。

人形は啼かない。参（後書き）

人形は啼かない。これにて了です。

ありがとうございましたm（――）m

狗も喰わない。

「世に蔓延る自称ハッカーめ、今から本物のクラッキングというものをを見せてやる」

報復屋ゼットーかたまつお 諜報員、風祭彩

「ただいま」

無事、龍之介を飼い主の許に返し、任務完了と相成りゼットーオフィスに帰宅したサイ。ドアを開けるなり彼の目に入った光景は普段の見慣れたオフィスではなかった。

机の配置が違う。社長席を除いた全てのデスクの上から荷物が下ろされ大して広くないオフィスの中央に寄せられている。所謂パーティーシフトな配置になっていた。見渡せば、机をせっせと運ぶハルアキとトウカがいた。

「なにしてんの？」

ダウンジャケットを脱ぎつつサイは姉弟に問う。

「マツとミモリが大きめ依頼を成功したから打ち上げやるって、今買出しに行ってる」

言って、ハルアキはウィンクを一つ。

男からウィンクなんて鳥肌ものだったが、トウカのサプライズ誕生日パーティーも兼ねて、という合図だということが事前の打ち合わせにより分かったのでサイはなんとか耐えた。

というかこの男は自分が誕生日だということを完全に忘れていたのではないかと疑問に思ったサイだが、女性尊重と優先ホとおもてなしの心満載のこの男ならありえないことでもないの、それならそれで彼のサプライズになるかと思ひ黙っておくことにした。

「……誰が？」

とりあえず会話をつなげようと質問。

「ツヨリ」

ツユリが自分から行動を起こすなんて、なんとなく疑わしいので  
トウカに視線を送ると、こくこくと頷き肯定を表す。

「どうして？」

やはりツユリが自ら雑用を引き受けるなどサイには不思議でしか  
たない。

「じゃんけん」

「へえ」

珍しいこともあったもんだ。と感心しつつもサイはまだ訝<sup>いぶか</sup>る。

「マツとミモリは？」

便宜上とはいえ主役のはずだが。

「帰ってくるのは夕方だって」

「ふーん」

適当に返事をしつつサイは外の空気を取り入れようと窓を開け放  
つ。

部屋のほどよく暖まった空気と外から流れ込む冬の乾いた空気が  
入り混じって心地良い。

「雨」

サイの行動を目で追っていたらしいトウカが呟いた。

つられてサイも空を見上げると先ほどまで青一色だった空は西の  
ほうから灰色がかっていた。

「そういうことか」

納得するサイ。

首を傾げるトウカ。

サイは再びジャケットを着ると傘たてから傘を一本引き抜きドア  
ノブに手を掛ける。

「どこ行くんだ？」

「迎えに行ってくる」

ハルアキの問いに少し弾む声を抑えつつサイは答えた。

一杯に詰め込んだエコバックを二つ、両手にそれぞれ一つずつ持

つてツユリは帰り道をとぼとぼと歩いてた。

普段なら雑用的な仕事を忌み嫌うツユリなのだが今日は違った。理由は簡単。

ツユリはそれの匂いを感じ、口の端を愉悦の形に歪める。

そうした彼女の表情はどこか大人びていて非常に魅力的なのだが、もったいないことに今は誰も見ていない。

「きた」

西側から灰色になり始めた空はついにツユリの上にも彼女が待ちわびていたものを降り注いだ。

ぱらぱらと控え目な雨は彼女の髪を湿らせ、すこしほこりくさい空気が肺を満たす。

今にも鼻歌でも歌いそうな足取りで、ツユリは濡れることも厭わずに雨の中歩き続ける。

形のいい頤おとがいつたい地面に落ちる雫は涙を彷彿とさせ、哀愁漂う雰囲気が彼女の昏い魅力を更に際立たせた。水もしたたるいい男とはよく言ったものだが、濡れたツユリはよりいっそう美しく見えた。

途端、彼女の体は雨粒との接触は断たれ、耳に一枚膜がかかったかのように雨音が遠のく。一瞬感じた雨が止んだような錯覚は、視覚に感覚を集中させることにより回復した。

ツユリは雨を遮った薄い影を見て、それから一秒にも満たない瞬間。幸せそうに目を瞑った。

「おお、こうしているとカップルみたいだ」

その言葉がなかったら最高なのに、と軽く落胆する。似合っていない、と心の中で批判する。でもそれを差し引いてもまだ有り余るやすらぎに胸が躍る。でもサイには決して気づかれないように、努めて無感動無関心を装って、

「うぜー」

と返す。

「走ったんだけど、ちょっとおそかったか？」

視線を上げればサイの口から白い煙が昇っていた。

ツユリは静かに首をふって答える。

「荷物もつよ」

「ありがとう」

ありがたくツユリはエコバックを二つともサイに渡す。

サイは苦笑いしながら二つのエコバックを右手に持った。

「あとこれタオル。今が冬だってことを忘れないように」

傘を持つ左手を器用につかい、サイはツユリの頭にタオルをのせる。

「ばかにするな」

言いつつツユリはぞんざいに自分の頭を拭く、拭き終わったタオルは首にかける。

「変わってないんだな」

そんなツユリを横目で見つ、サイは懐かしげな口調で言った。

「何が？」

「雨が降りそうになると外に出る癖。しかも傘も持たないで」

「そうだったけ？」

ツユリは、ふふ、と鼻を鳴らすと、勢いよく傘から飛び出した。

少しサイとの間をとって振り返ると、ばつ、と両手を開く。そうした行動は普段年不相応に大人びたツユリを幼く見せ、サイはつられて破顔する。

「私、雨って結構好きかも」

「名前からしてそうだからな」

言いながら少し早歩きで間詰めてきたサイが、ツユリの上に傘を差す。

「やっぱり名前のせいかな？」

その問いは誰にでもなく、雨中に霧散するようにツユリは言った。ツユリは何故かスキップしたい気持ちになった。しかし水溜りを撥ねないように心は躍らせないようにする。

「そつえばハルアキの奴、トウ力の誕生日は覚えてるくせに自分の誕生日は忘れてるみたいだ」



ツユリは小さくふき出す。

「なにそれ？」

「ホントだって」

「双子なの？」

「だからプレゼント渡すまで黙っておこう」

「わかった」

一指し指を自分の唇にあて、ツユリは微笑む。

「で、結局何買ったの？」

サイは二つのエコバックを持ち上げて中身を確認する。

「タケノコとさつまいもと魚肉ソーセージと土鍋とカセットコンロ」

「ん？」

自分の耳を疑うかのように、サイはエコバックを左右に広げて中身を再度確認。

「あとケーキね」

「で、これで何をする？」

「鍋」

臆面なく言うツユリ。

「戻ろう。ツユリ」

「なんで？」

「今日はトウカとハルアキの誕生日だってことは？」

「分かってる、だから私手ずから手料理を振舞おうと……」

「よし、戻ろう」

「え？」

サイは傘とエコバック二つを片手に持ち替えるとツユリの手を引く。

ツユリは一瞬迷ったが、大好きな雨の中、もう一回買い物も悪くないなと思い、水溜りを蹴り上げて、踵を返したサイの背中を追った。

少女は泣かない。壱

「あなたと違って自分の弱さを認めてるだけです」

報復屋ゼットー店主代理、あまみ つゆり雨海梅雨理

「むむ」

逢崎ひよりの学校には少し変わった男子生徒がいる。

運動神経抜群、成績優秀でやさしいとあるのだがなぜかクラスには溶け込まず、わざと目立たない用にふるまっている不思議な男子。

「むむむ」

ひよりは現在、その教室のドアの影に隠れてその彼を観察している最中だった。

ドアから顔だけを出し、教室の中を窺う。自分の教室で。

はたからどうみても変人的行為を何故しているのかと今のひよりに問えば、乙女だからという答えが返ってくる可能性はゼロではないだろう。

何故なら何を隠そうひよりも彼に好意を寄せる女子の一員なのだ。さて、何故ひよりがこのような変態チックな行為にいたる道程を辿ることになったか、その発端は今朝にいたる。

いつもよりはやく起きてしまったひよりは家に居ても所在なかったので、母の愛情のたっぷりな手抜き弁当の完成と同時に、それを受け取り家を飛び出した。

そしてひよりは気づいた。学校に行ってもやることがないことに、学校についてから気づいたのだ。下駄箱あたりで。

がっくりと肩を落とし、ひよりは教室に向かった。教室のドアに

手を掛け、開こうとしたところでひよりの動きは止まった。

教室の中に、先客がいた。

ひよりはすばやく膝を折り、しゃがむ。別に隠れる必要は無かったのだが隠れてしまった。心のどこかに少しやましい気分があったのかもしれない。という気持ちが分かった気がして少女は少し大人の階段を登ったのであった。

閑話休題。ドアの覗き窓から顔半分　目までを出して中の様子を窺う。頭がバツチリ出てるので、少しでも視線が向けられたらとりあえずジ・エンドなのだが暇を持て余したひよりはまったくもって気にしない。考えたら負けなのだ。ひよりは胸中で勝手に納得する。

「ごほん」

ひよりは自分の脳内に咳払いを入れ本来の目的（覗き）を思い出す。音を出してばれたらジ・エンドとかは以下略。

教室内の人影は二つ。一人はひよりの知らない人物だった。

「む、眼鏡美少女」

セミロングのさらさら黒髪眼鏡美少女は腕を組み、席に座る男子生徒を見下ろしていた。

その男子生徒こそがひよりが密か（？）に想いを寄せる相手、風祭彩<sup>まっさい</sup>であった。

状況はおぼろげに確認できた。しかし、二人が話す会話までは聞き取れない。なんとか二人の肉声を拾おうと、ひよりは覗きをやめ、ドアの前に腰を下ろし耳を当て、盗み聞きを開始する。

しかし、何か会話しているようだがほぼ聞き取れない。

耳をこれでもかというくらい強く押し付け、必死に教室内の音を拾おうとする。だが、声を拾うことに集中を割いていたせいで気づけなかった。近づいてくる足音に。

やおら教室の扉が開く。

前に倒れなかったのは僥倖だった。これで風祭彩には見られない。扉を開けた人物と目が合った。眼鏡美少女。

綺麗。ひよりは素直にそう思った。

「あ……」

ひよりは覗きとその他もろもろに対する謝罪を口にしようとした。しかし、口からこぼれたのは言葉にならない呻き。

眼鏡美少女のほうもひよりを一瞥しただけで声を掛けずにそのまま立ち去ってしまった。

ひよりは立ち上がり少ししわになった衣服を整えると、改めてドアに手を掛け、教室に入る。

想い人と二人きりの教室。

でも、声は掛けられない。何故なら逢崎ひよりは乙女で、しかも風祭彩とは一度も会話したことがないのだから。

時は戻って昼休み。

一から四限までの授業中の乙女の苦悩を経て今に至る。

朝の所業を彷彿とさせる体勢でひよりは変態チックに教室内を覗き込む。視線の先にはもちろん風祭彩。

乙女の名誉のために述べるが、ひよりは毎日このようなストーリーカ―行為に及んでいるわけではない。今朝の出来事があつての今なのだ。

というか朝の美少女が気になってしかたないというのに一心不乱に想い人を見つめ続けることに意味があるかあと問われれば否と答える他ないのだが、ここは、恋は盲目。とだけ述べておくしかないだろう。

瞬間。ひよりの後頭部に激しい痛み。

「何やってんの？ ひより？」

友人からの痛烈な贈り物に後頭部をさすりつつ抗議の目を向ける。

「凶器は弁当箱かッ！」

視線の先、ショートカットのボーイッシュな少女　志織は冷ややかな流し目にニヒルな笑みを貼り付けるといふ器用な業を持って

クールにいなすと、ひよりが入れないでいる教室の中に消えた。

「そんなに恋しいなら告白してしまえば？」

「ひゃあうっ！」

途端、後ろから、耳元に吹きかけられた吐息のような言葉にひよりはだらしなない悲鳴を上げる。

「ムリムリムリムリ！」

ひよりは顔の前で手をぶんぶん小刻みに振りながら、座ったまま後じさって声の主から距離をとる。

その声の主、お嬢様のようにふわふわとした雰囲気を持つ、真綺はサデイスティックに恍惚そうな笑みを浮かべると、人差し指をあとにあて、考えるそぶりを見せる。

「でも、才色兼備、文武両道っていつの？ 彼。結構人気あるみたい、ひよりちゃんじゃ無理かも」

「ええ！？」

ひよりの表情が目に見えて曇る。

「ウソだよ」

実際、真綺の言葉は事実以外の何物でもないのだが。

「ちよつと真綺！」

無礼な友人に灸を据えようと立ち上がろうとしたひよりの膝の上に美術の教科書一式が渡される。

ひよりはあわててそれらを胸に抱く。

「ほら、次、美術室だよ」

見上げれば、教室に消えた志織の姿。どうやら教室に入れないひよりのために美術の道具を取ってきてくれたらしい。

「あ、うん」

少しばらついた教科書類をまとめ、両手で胸の前に抱えるとひよりは再度立ち上がるうとした。しかし、急激に立ち上がるうしたためふらついてしまい通行人とぶつかってしまった。

ひよりはバランスを保てず床にしりもちをつく。

「す、すいません！」

ひよりはあやまりつつ、ぶつかってしまった相手を見上げる。そこに佇んでいたのは、

「あ……今朝の……」

眼鏡美少女だった。

「落としたよ？」

視線を廊下に向ければ、先ほどまでひよりの胸の中にあつた教科書たちは床に散らばってしまっていた。

眼鏡美少女はスカートを撫でつけ手折り、綺麗な動作でしゃがみこむと、散らばった教科書を集め始める。筆箱まですべてかき集めて、向きをそろえ綺麗に整えるとひより向きにひっくり返し、呆然とするひよりの前にそれを差し出す。

「逢崎さん？」

教科書の裏に書いてあつたのを見たのであろう、名前を呼ばれて我にかえつたひよりはそれを受け取ると、

「あ、ありがとうございます！」

地面にへたりこんだままふかぶかと頭を下げる。ひより自身にも、なぜに敬語？と自分自身の行動が謎だった。

眼鏡美少女はにつこりと美少女スマイルを浮かべると、教員棟のほうに去っていった。

「大丈夫？ ひよりちゃん？」

特に危機感もなく真綺は問う。

「あれ、一組の人だよ、今年のミスコン確定だって言われてる……名前はなんだっけ？」

ひよりは志織に手をかしてもらい立ち上がる。

「そうそう綺麗だよ。雨海さんだっけ？ でもあの子いつも一人だよ」

「人と話してるとこみたことないかも」

「ん、私は一回みたことあるかも」

「うっそ？ 誰と」

「名前は分かんないんだけど……ほらいるじゃない？ 二年のちっ

「ちやい貞子みたいな先輩」

「だれ？ それ？」

「髪の毛すっごい長い、こんくらいのちっちゃい人」

「知らない」

友人二人の会話が飛び交う中。ひよりの頭の中はいっぱいいっぱいだった。

だって、眼鏡美少女と会話（？）をしてしてしまった、とか、教科書を拾わしてしまったとか、とかとかとか、と、ひよりは脳内で頭を抱える。そして抱えた頭の上を更に友人二人の会話は飛び交う。ミスコン確定？ 雨海さん？ いつも一人？ でも今朝は風祭彩と一緒に？ 告白回数？ 今年で二十件？ 貞子？

「うがぁあゝ」

と、ひよりは脳内で情報をしきれずエラー音を吐き出す。頭を抱えたままものすごい角度に身体をねじった。今にも脳内世界に身投げしようとしたひよりを、

「ちよつとひより！ 聞いているの？」

志織の声が現実呼び戻した。

「え？ ごめん。何？」

「今日帰りカラオケいかない？」

今日？ ひよりの中で何かが引つかかる。そして脳内スケジュールを開く。検索には一秒もかからなかった。なにせ今日は、

「ごめん！ 今日お父さんとお母さんの結婚記念日なんだ」

先ほどの泥沼な苦悩がなかったかのように、すがすがしい笑顔で言い切る。

「まったくいまどきの女子高生にあるまじき発言だね、お母さんはこんな娘をもつて幸せだよ」

腕を目に当て、感極まった泣きまねしつつ志織。

「ひよりちゃんお父さんとお母さん大好きだもんね」

さらりと志織を無視しつつ真綺。

「うん！」

臆面なく言い切る姿は、まさしく全国的女子高生の娘を持つお父さんの味方だった。



少女は泣かない。 壱（後書き）

十日間連続更新宣言初日！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。 貳

逢崎ひよりは両親が大好きだった。

父は高校生のときにテニスの関東大会で優勝したことだけが誇りのいたって普通のサラリーマン。

母は料理と花への水遣りが生きがいの専業主婦。

多くの子持ちの家庭が共働きをせざるを得ない中。父の仕事一本で生活していける逢崎家は割りと裕福なほうの家庭なのであろう。けれど金を持て余すことのない、そんな中の上な生活。贅沢はそんなにできないけれど食うに住むに困ることはない。姉妹はいないけれど父がいて母がいて自分がいる。両親は愛を一身に注いでくれて自分はそれに答えてすくすくと育つ。そのことがひよりにはこの上なく幸せだった。

時刻は午後七時を回った頃。

計画は狡猾。用意は周到だった。

ここまで時間を待ったのは自宅マンションに両親二名が揃うのを待つため。

花束も買った。ケーキも買った。例年のデータから父もケーキを買ってくるであろうことを予想して小さめのものを買ってきた。ようは気持ちなのだ。感謝する気持ち、祝う気持ち、大好きな気持ち。結果的にお財布にもやさしかったことは内緒である。

すう、はあ、とひよりは深呼吸する。お祝いの言葉は決めていた。別に決めるほどの量ではないのだが、こうゆう段取りはちゃんと準備してかからないと本番で頭が真っ白になってしまうのは自明の理というやつだったので、一週間前から考えていたのだ。

ドアノブを回し、扉を開いて家の中へ。ただいまの言葉はあえてかけない。靴を脱ぎ捨て一目散にリビングへ、花束を構え、たぶんここで勝手に笑みが漏れるだろうことは織り込み済み、そしてこう言うのだ。

「結婚記念日おめでとう！ 二人がいつも仲良くしてて私はうれしいよ！ でもたまには私も混ぜてくれるともっとうれしいな！」

我ながら恥ずかしいセリフだ。なんて思ったら負けだ。

すっ、はあ、とひよりは深呼吸。

シミュレーションは完璧だった。あとは実践あるのみ。

ひよりは目の前のドアに向き直る。逸る心を抑え、計画を反芻しつつ、ひよりは意を決してドアノブに手をかける。

がちゃ。

ドアは独特の金属音を立てて 開かなかった。いきなり計画は崩れ去った。

「あれ？」

おかしい。ひよりは思った。

一応ひよりは鍵を持たされてるが逢崎家は家族全員が揃うまで鍵を閉めることはない。時間を鑑みるに誰もいないということはないだろう。特別な日なのであるいは、なども思考をよぎるが、両親がひよりに何も伝えずにどこかに出かけるなど今までなかったことなのでひよりは困惑した。

とりあえず、自分の鍵を出して開錠。ドアを開き我が家に足を踏み入れる。

中は薄暗い。誰も帰って来ていないということはありえないから、自分を待ちきれず、どこかに二人で行ってしまったのだろうか、ひよりは思考をめぐらす。

「ただいま」

なぜか、自宅の妙な薄暗さが不安になってしまっただけで控え目にはあるが声をあげてしまった。もう計画もあったものじゃない。

ひよりは歩きなれたはずの廊下をそろそろと進んでゆく。

「お父さ〜ん？」 いるの？

「お母さ〜ん？」 いるの？

控え目に発したひよりの言葉が静かな廊下に響く。

リビングへの扉を開く。

「ひっ！」

そこにはダイニングテーブルに突っ伏す母親がいた。

「ちよっと、お母さん！ 大丈夫？」

ひよりが近づいて母の身体をゆすると母はむくりと身体を起こした。

「ひよりちゃん。お帰り」

眠っていたらしい母は眠気眼ねむけまなこを人差し指でこすると娘を見て微笑む。

「もう、びっくりさせないでよ、鍵も掛かってたし、お母さん倒れてるしびっくりしちゃったじゃん」

顔の筋肉が緩んで笑みになってゆくのを感じながら、ひよりは内心ほっ、と胸を撫で下ろす。

「ごめんね」

そう言つて力なく母も笑った。しかし、

「お母さん、どうしたの？」

手をどけた母の顔はあきらかに異様だった。血の気はひいてるし、目は充血して晴れ上がっている。なにより右の頬に、

「あざ？」

ひよりが言つと、母はばつが悪そうに顔を伏せて、手のひらで痣を覆った。

「え？ どうしたの？ それ？」

自然言葉に力がこもってゆくのはひより自身にも分かった。

「ひよりちゃん。それどうしたの？」

ひよりの言葉を黙殺し、母が指差したのはひよりの持つ、花束とケーキ

「え？ ああこれね、今日お父さんとお母さん結婚記念日でしょ？ だからお祝いに。ケーキはお父さんも買つてくると思ったから小さめで、花束はお母さんみたいに詳しくないからお店の人に頼んでやってもらったんだ」

一応、母の質問に答えるものも、ひよりの口調には、母の頬に対

する疑問と焦りがにじみ出る。

「そういえば、お父さんは？」

しかし、ひよりは必死に笑顔を取り繕うとする。それがかえってぎこちなくなることに少女は気づけない。

瞬間。母の瞳から光が失せた。

「  
」

「え？」

ひよりは身体が傾いでゆく感覚に見舞われる。そしてまず、自分を耳を疑った、次いで母の言葉を疑った。最後に現実を疑った。

疑問は後ろから解決していく。

垂れた手で太ももをつねった。痛い。

空いた手で血がにじむほど拳と握った。痛い。

犬歯で唇を食いちぎった。やっぱり痛い。

最後の疑問は間違いということが確証された。

二つ目の疑問。

部屋に張り詰める空気、母の状態、自分の心臓の鼓動。もう答えは分かりきっていた。

あるいもつとずっと前からわかっていたのかもしれない。

幸せだけを見て気づかないふりをしていたのかも知れない。

今日のこのひより行為だって、この危機を察知しての行動だったのかもしれない。

いったい歯車はどこで抜け落ちたのか、そのことがひよりの中につかえてわだかまった。

だから、訊くことはない。ひよりはそう思った。これ以上母を苦しめてどうする。後日落ち着いてから改めて話し合えばいいそうおもった。しかし、外れた歯車は思考と行動を逆行させた。

自然と口が開き、喉が震える、動揺のため視点は定まらない、きれぎれの言葉は小刻みな振動を持ってひよりの口から零れ落ちた。  
「お父さん。どうしたって？」

もはや母の蒼白な顔に感情を垣間見ることはできなかった。

そして、淡々と、母は語った。

「お父さん。他の女と出て行ったわ」

ひよりの中の真実と信じて止まない小さな幸せが崩れてゆく瞬間だった。

少女は泣かない。弐（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 二日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。参

「ちょっと、ひより！ 聞いている？」

「ああ、うん。なんだっけ？」

今日何度目かのやりとり、さすがに心配になって志織は顔色を窺う。

「ひより大丈夫？」

「ひよりちゃん最近ぼけつとしてることおおいよね、もしかして、本格的な恋わずらい？」

真綺も気を利かせて場を和ませよう茶化してみる。

「ほら、愛しの風祭くんはそこだぞー」

志織で箸で示した先には風祭彩が複数の男子生徒と談笑しつつ弁当をつついていた。

「ああ、うん。風祭君ね…… そういえば来月はバレンタインだね」

名前を口にすることすら恥ずかしがっていたひよりが、投げやりに、すんなりと想い人の名を口にしたことによって、志織と真綺は顔を見合わせた。

そんな二人の心配もひよりの心には届かず。ひよりは購買で買った焼きそばパンを黙々と口に運ぶ。

「そっついえば、ひよりちゃん最近弁当じゃないね」

「うん…… ちょっとお母さん忙しくて」

言つて、ひよりは視線を落とす。

弁当。そういえば、料理好きの母の弁当はいつも色鮮やかで量はそれほどでもないが豪勢だった。いつごろからあの色とりどりの弁当を見てないのだろう？ ひよりは記憶を探る。確か、二ヶ月前、突然。昼休みに弁当箱を開いたときは驚いたが、作ってもらってる手前、母は非難できなかった。それとなく理由を訊いたことはあったが、母はただ、ごめんね。と謝罪を口にするだけだった。

思えば、すでにそこから家族の変化は始まってたのかもしれない。



ひよりが気づかなかっただけ、いや、知ってて目を閉じていただけ。

父が逢崎家を出て行ってから一週間が経った。

正確には逢崎家ではなくなる家だ。

先日郵送で離婚届が届いた。父の署名と実印は記入済みで、後は母が必要事項を記入、役所に出すだけの書類。

こんな紙切れ一枚で家族の絆が、なんて月並みのことも思ったが、もともと壊れていたものを整えるだけだとひよりは沈んだ心で納得した。

ひよりはポケットの中をまさぐる。

そこには指輪が入っていた。

父と母の結婚指輪。当時奮発して買ったそうで、現状でも価値はそこそこのものらしい。指輪と共にひよりの机の上に置かれていた父の最期の書置きにそう書いてあった。だからそれを売って当面の生活費にきなさい。と。

『母さんに話しても冷静に理解できないだろうから、ひよりに託す』に始まる父の手紙。内容を要約すると、

父が家から持ち出したのは洋服一式と通帳、その他腕時計、判子など必要最低限のもののみ。ローンを払い終えたマンションは好きに使ってよい。ひよりの学費も先ほど一括で払い終えたから安心して学校に通いなさい。

そして最後に、ごめん。母さんを頼む。と少し下手くそな、まぎれもない父の字で、そう書いてあった。

母に裁判を起こすつもりはないらしい。復縁なんてもつてのほか。つまり、ひよりたちは母子二人でこの先の生活を賄わなければならない。

二人を捨てた父は、希望を残して去った。しかし、その希望が母を壊した……。

「あのさ、言いにくいのはわかるんだけどさ、私たちもさ、なんてゆうか、その……」

「困ったことがあつたら何でも話してね」

「あ、私の言葉を！」

それは友人二人の言葉。話したところで我ながらいい友達をもつたなと死んだ心にすこし色がつくのをひよりは感じた。

すつ、はあ。

確か一週間前のあの日もここで深呼吸をした。

あの日を境に我が家はこんなにも入りづらいものとなってしまうた。

意を決して扉を開く。

「ただいまー」

なるべく元気に聞こえるように言いながら玄関の靴を確認。母の靴が一足。投げ出されるように靴脱ぎ場に散らかっていた。

それをそろえてからひよりはリビングへ向かう。

「ただいま、お母さん」

そこには一週間前とは比べ物にならないくらいやつれた母の姿。

「ごめんね、お母さん今日もお仕事見つからなかった」

ちくり、と母の謝罪の言葉がひよりの胸にしみる。

母が働き口を探しに行くといつて毎日図書館で時間を潰しているのをひよりは知っている。

「大丈夫、私も昨日バイトの面接受かったし」

嘘だった。

「ごめんね」

母はまた娘に謝る。そのたびに娘の心は傷ついてゆくとも知らず。

「お母さんお花好きじゃん。だから、お花屋さんとかどうかな。駅

前のとことかいんじゃない？ 私も学校の帰り道に通るからさ、

そしたら毎日、お母さんどうしてるかなーって覗きに行つて……。

だからさ

ひよりは必死に笑顔を取り繕った。しかし、母の口から零れ落ちるのは、

「ごめんね」

信頼を寄せていた者が離れ、愛していた人が壊れる。それを受け入れるには少女の器はあまりにも小さすぎた。

「なんでよ、お母さんが気にすることじゃないって」

大事なものにひびが入る感触。ひよりはそれを壊さないように必死に笑顔を作る。

「ごめんね、ごめんね」

ひよりはもうなにも言えなかった。

ただ娘に対してあやまり続ける母の小さな背を見つめて。

一つの感情が生まれるのはたやすいことだった。

「ごめんねごめんねごめんね」

吐いた嘘は後から本当にすればいい。

ひよりは無理やりポジティブシンキングをつくってパソコンに向かった。バイトの求人を探すためである。

母とつゆり二人の生活において問題は山積みだ。父の書置きどおり指輪を売って当面の生活費を確保するとして、その後の生活費、今の母の状態が続くようなら病院に雇わなければいけないかもしれない、しかし解決方法は簡単、自分が働けばいい。働いてお金を稼げばいいのだ。しかし、そう決心しつつも心のどこかで父が帰ってきて全て丸く収まる空想を描いてしまう自分がいる。

「いや」

ひよりは頭かぶりをふっていらぬ妄想を追い出す。

頭痛が激しい。めまいがする。そういえば最近よく眠れない。授業にも集中できないし、どうにかしてる。こんな状況なのに、身体が思うように動かない。いや、こんな状況だからこそか？ こんなことなら父に言われたとおりもっと身体を鍛えておけばよかった。

父……

「嫌いや」

ひよりはもう一度、頭をふっていらぬ雑念を吹き飛ばす。

とにかく今は金を作らなければいけない。

ひよりはパソコンに向き直り求人案内をサイトを開く。

学校に帰りに働くとして生活を二人分賄うには普通の自給ではもの足りなかった。一瞬暗い働き場も頭をよぎったがもう一度、頭を振って追い払おうとする。

しかし、気づいたときひよりの前のディスプレイには俗に裏サイトと呼ばれるページが開いていた。そこにはありとあらゆる非法な労働への求人案内や依頼窓口へのリンクが貼ってあった。

そこで、ふとひよりの目に止まるものがあった。それはサイトの端に貼ってあるバナー。

「報、復屋？」

マウスを握る右手が震える。鼓動が高鳴るのが分かる。砂糖水に吸い寄せられる蟻がごとく、否。飢えたハイエナが屍骸に貪りつくようにひよりの心はただ一点へとひきつけられていく。

この瞬間、少女の中で生まれた感情は、堰を切ったようにあふれ出した。

少女は泣かない。参（後書き）

十日間連続更新宣言！ 三日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。肆

「報復屋ゼットー店主代理の雨海梅雨理です。はじめまして」

噂に聞いたことのある復讐代行を受け持つ業者、報復屋。詐欺かと疑ったが、奔流となった感情を前に少女の脆弱な理性は無力だった。

「はじめまして……じゃ、ないですよね、……あまみ、さん？」

差し出されたツユリの手のひらを受け取りながらひよりは目の前の美少女に言葉を問いかける。

報復屋店主代理を名乗った少女は先日眼鏡美少女だった。今日は眼鏡をしていないが確かに本人だ。

「あ、すいません。えっと、憶えてないですか？ こないだ私、廊下で教科書とか拾ってもらっちゃって」

無反応を装ったツユリに動揺して、ひよりはあわてて説明を加える。

「ええ、記憶してます」

ツユリは静かに言った。ひよりは少し安心してほっと溜息をつく。更に、ひよりを驚かせたことがあった。

「あ、風祭くんも、同じクラスなんだけど私のこと覚えてるかな？」  
待ち合わせの喫茶店に現れた雨海梅雨理に付き添うように店内に入り、彼女の隣に腰掛けたのは風祭彩だったのだ。

サイはひよりの問いに、言葉を発さず小さく顎を引いて応えてくれた。

「では、依頼の内容に」

本来ならばネット上で大まかなやりとりは済ますようだが、今回はひよりが急ぎ、と無理を言って早めの用談を持ちかけたため、依頼内容の確認はまったく進んでいなかった。

「お父さんが、他の女の人と出て行っちゃったんです」

ひよりは歯噛みし、言いづらそうに言葉を捻り出す。

「それで？」

ツユリは冷たく、言葉を促す。

「お母さん、人が変わったように暗くなっちゃって、全然笑わなくなつて、私もつらくて……、お母さん。傷ついてるはずなのに裁判も起こさないっていうし、お金もつけとらないし……、あの、それで」

とつとつ、と事象と感情を織り交ぜて話すひよりはいまにも泣きそうだった。しかし、決心したように顔をあげるとツユリの目を見据えて言った。

「復讐。したいです」

ツユリも目をそらさず、ひよりの視線を真っ向から見据え返す。  
「理解しました。自分と母の生活を壊した者に報復をしたいと？」

「はい」

力強くひよりは頷く。

「承りました」

静かに目を閉じてツユリは言う。

「じゃあ！」

興奮して身を乗り出すひより、その勢いを削ぐようにツユリは言葉を発する。

「では、どちらに？」

「え？」

ひよりの思考と身体が硬直した。

「奪ったほうか、壊したほうか」

ツユリは二つの選択肢を提示する。奪ったほうか、壊したほうか、二つの未来の可能性。理解できずに戸惑うひよりの心中を察したのかツユリは説明を挿<sup>はさ</sup>む。

「あなたの父親を奪ったその女性が、あなたの父親か、ということ  
です」

「どういうことですか？」

若干の憤り覚え、感情を隠そうとせずひよりは問う。

「確かに、あなたの家庭からお優しいお父上を奪ったのはその女性で間違いありません。ですが――」

淡々とツヨリは説明を続ける。言葉を切って、ひよりの目を射るように見る。発する言葉は刃物のように、

「最後に出て行く選択をしたのはあなたの父親です。過程や誘惑がどうであれ、一つの幸せな家庭を壊したのは他でもないあなたの父親のほうです」

「っ！」

耐え切れず、ひよりは目を逸らしてしまった。下唇をかねて俯く心が折れないように強く拳を握る。拳に視線を合わせて大丈夫、と心の中で呟く。

「で、でもその女の人が居なかったらお父さんは――  
そう、その女が居なかったら。」

あんなに優しくかった父が、家庭を捨て、母を壊し、自分を苦しめてるなんてひよりは認められなかった。プライドに近いその感覚は目の前に居る人間に苛立ちを覚えさせる。正論は人を救ってくれることなんてないのだ。

あなたの言葉は嘘だ。人は人によって変わってしまうだから変えられた人に責任なんてない。

焦り、言葉を次ごうとしたひよりをツヨリの冷たい口調が遮る。

「人は生きている間に数え切れない人と出会います。人の心が人との関わり合いで変わってしまったからといってそれを言い訳にすることはできません。結局、最後に決めるのは自分自身ですから――」

ひよりの言い訳は先回りしてあっさりと防がれた。まるで心を読んだかのように。

言葉を紡ぐ気さえ起きない。

ひよりは歯を食いしばる。そして荒れる心をできるだけ隠す。

「強いんですね、雨海さんは」

言葉には若干の棘があった。

「いえ、あなたと違って自分の弱さを認めてるだけです」



机の上で指を組み、あくまで冷たく、ツユリは言いやる。

「そうなんだ……」

ふふ、と気がふれたかのようにひよりは笑いを漏らした。

「別に今すぐに決断していただかなくても結構です。もし契約を白紙に戻すということがあってもキャンセル料は頂きませんのでゆつくりお考えください」

「ありがとうございます」

「構わないですよ。では、決断ができれば私の携帯に連絡をください」

ツユリは番号を書いたメモをひより向きにひっくり返し机の上に差し出した。

「はい。ありがとうございます」

ひよりはメモを受け取ると、伝票を取って、早足にレジに向かった。

少女は泣かない。 肆（後書き）

十日間連続更新宣言！ 四日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。 伍

「どうした？」

ひよりが去った後の喫茶店、隣でコーヒーを飲むツユリに向かってサイは重々しく口を開いた。

「何が？」

不機嫌さを隠さずにツユリは言う。

「機嫌悪そうじゃん」

「サイは気分がいい？」

普段名前なんて呼ばないくせに、あえて協調してツユリは言う。

「知り合いだからか？」

思い浮かんだ理由とは違う答えをサイは口にする。

「いや、違う」

ツユリは少し表情を硬くした。

「身内に復讐したとして幸せになれるわけがないんだ」

解りきっていた答えに、サイは押し黙る。ツユリは更に言葉を続けた。

「彼女の母親は賢明だ。裁判を起こさず旦那との接点を完全に断つて身を小さくすることによってこれ以上自分と娘がこれ以上傷つかないようにしたどうしてだか解るか？」

「娘を護るため？」

またしても思い浮かんだ理由とは違う答えを口にする。それはサイ自身の希望する世界であるための答え。

「弱いからだ」

解ってる。サイは心中でそう呟く。

「弱いから、自分が傷つくことを怖れた。弱いから、娘を護れない自分自身を怖れた」

容赦なくツユリの言葉はサイに浴びせられる。

「じゃあ、逢崎は強いから報復に望んだ？」

そんなわけない。答えは解ってるのに聞き分けのない子どものようにサイの口からは疑問がこぼれる。

「違うな、もつと弱かったから報復を望んだ」

「まるで人の心が読めるみたいだな」

それは皮肉だった。実際ツユリは会ってない人の心までも解るように語る。

「彼女はもう壊れている」

サイの皮肉は黙殺し、ツユリはサイの希望を断つように言った。

「でも現状、逢崎はまた傷ついている」

それでも溢れ出た反発心は止まらない。

それは、ツユリに対するものでなく世の理に対するもの。サイはそれをお門違いと理解しつつもツユリにぶつける。ぶつけずにはいられなかった。

「あたりまえだ。彼女の母親の行動はあくまでこれ以上傷つけないようにするもの、傷を癒すものじゃない」

その傷は報復屋によって治せる傷なのか？ 答えは否。

「そこまで解ってて」

なんで？ サイの中の疑念が爆発する。

「なんで、逢崎に父親への復讐を進めるようなことを言った？」

「おまえも解っているだろ？ このケースで女のにのみ復讐を行うことは不可能だ。女が傷つけばあの子の父親が傷つくのは自明の理。逆もまた然り。どちらか一方が傷つけばもう一人も確実に傷を負う。

父親が彼女の言うとおりの人物であつたならなおさらだろうな」

ツユリは淡々と語る。たしかにそうだ。逢崎の父が、愛人のほうを選んで出て行ったのならその愛人だけを傷つけるのは不可能だ。愛するものが傷つくのを見て傷つかない人はいない。ましてや妻と愛人の間で揺れた心なら傷つくのはたやすいはずだ。

それはツユリの優しさか？ そう問おうとしたサイの唇はツユリの人差し指に押さえられる。

指を離さずツユリは立ち上がろうと体を背けて言う。まるでサイ

の心を読んだかのように。

「仕事だからだ」

ツユリは椅子から立ち上がり、名残惜しげにサイの唇から指が離れる。

伝票は上司持ち、いつものことだった。わだかまりが消えない仕事もいつものことだった。

肩をすぼめ、ダッフルコートのポケットに手をつ突っ込んで歩くツユリの背中をサイは追う。

「でもやっぱり、彼女は帰ってくるんだろうな」

報復屋店主代理を担う少女の背中はどこか寂しげだった。

少女は泣かない。 伍（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 五日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女な泣かない。陸

「ちよつといいか？」

冬の昼休みはポジション争いが激しい。皆、我先にとストープ付近に移動するので、ひよりのようにぼけぼけている性格の持ち主に暖というは文明の力に当たることは許されなかった。

そんなこんなで、ひよりが志織と真綺、と、いつものメンバーで少し肌寒さを感じつつ昼食をつついていたときだった。

風祭彩からひよりに声がかかった。

「え？」

突然のことで動転したひよりは思わず聞き返してしまった。

「話があるんだけど……」

ひよりは目の端で友人二人の顔が華やいでいくのをひよりは見逃さない。

「え、っと今、真綺と志織とお弁当たべてるから……」

「（ちよつ、ひよりちゃん！？ なにいつてんのッ！？）」

「（そーだよ！ チャンスじゃん！ …… チャンスじゃん！）」

真綺と志織が取り乱す一方、ひよりの対応は落ち着いていた。サイが話しかけてくれたことで脳内お花畑になって思考がフリーズしていたわけではない、ひよりの頭の中をよぎるのは先日の報復屋の件。

「そつか……」

座っているひよりは立っている彩を見上げる体勢にある。

気まずそうに後頭部を掻きつつ踵を返すサイをしっかりと上目使いで見据え観察すると、タイミングを見計らって言った。

「放課後なら……いいよ」

聞こえるか否か、それくらいの声量で、まるで乙女が恥らうような声音で立ち去る憧れの人の背中に吐露する。言葉というには覇気が足らず、独白と呼ぶには訴えが強い。少女の口から出たのは計算

と言つ名の毒。少女の心に巢食う感情は確実に糸を伸ばしていた。

世界が橙ぐんだ放課後、サイは指定したされたとおり放課後の教室でひよりの姿を待っていた。帰りのホームルームが終わるなり、当のひよりは鞆を持って友人二人と教室を出て行ってしまったが、わずかな希望に賭けてサイは少女を待っていた。

といっても所在無く暇なので雲の数でも数え始めようとしたところで待ち人は現れた。

「風祭くん……」

ひよりはまるでサイが待っていたことが意外そうに言った。そして夕焼けのせいかその頬は紅い。

「ごめんね、二人がうるさくてなかなか抜け出せなかった」

「うあ、いいよ」

「話つてもしかして……お仕事のこと？」

サイが肯定すると赤みがかっていた少女の顔に影が差す。

サイはなるべくその暗い表情を見ないように言った。

「あのさ、よく言えないんだけどさ、お父さん……えっと」

けれど、言葉は上手に頭に浮かばない。サイはいったん言葉を切ると、問題のアプローチを変えようと試みる。

「逢崎は父親が好きか？」

「うん」

ひよりは控えめに頷く。けれど少女の目には明確な意思が感じられた。

「そっか、よかった」

サイは少女の言葉に安堵し、穏やかに破顔する。サイは窓際に目をやる。

開け放った窓から吹き込む冬の風は刺すように冷たく、先ほどサイが数えようとした雲を流す。それを一つ一つサイは目で追っていくとちょうど沈みかけの夕日に視線が行き着きサイは目を細めた。



「か、風祭くんは好き？」  
「両親のこと」

沈黙の間がもたなかったのか今度はひよりがサイに質問を投げかける。

「どうなんだろう、父親に会ったことないからな」

サイは遠い目をして言う。

「そうなんだ、ごめんね」

「どうして？」

「あ、いや、なんか気まずいこと聞いちゃったかな、なんて」

居づらい雰囲気を作ってしまったと思ったのか場を和ませようと必死に作り笑いを浮かべる。しかし、どうもその仕草がサイのツボにはまってしまったらしく、サイは耐え切れず吹きだしてしまった。

「な、なに？」

「なんでもない、逢崎っていい奴だな」

「そ、そかな？」

「俺さ、父親どころか母親にも会ったことないんだ」

別に自分から話すことでもなかったがサイは話したいと思った。

このやさしすぎる少女に、自分はぜんぜん気にしてない。と伝えるため。自然、口調も軽快になる。

「でさ、なんか特につながりのないおっさんが父親代わりに俺を育ててくれて、その人も数年前どっかいっちゃって、今、家族って呼べる奴はツユ……雨海くらいなんだ」

「雨海さん？」

「そう、あいつもそのおっさんが何処からか拾ってきて、おっさんが居なくなるまで、おっさんと俺と雨海ともう一人と一緒に暮らしてた。まあ、おっさんが居なくなっただけからは別々だけど……だからさ、寂しくなんてなかったから逢崎もあんまり気にすんな」

ひよりは短く顎を引いてと首肯する。

「風祭くんはそのおじさんのことが好き？」

「嫌いだよ」

即答。考えたのではなく自然に唇が言葉を紡いだ。サイ自身にも

自分の声のトーンが一段階下がったのは分かった。

「だから、かな、自分を育ててくれた人を嫌いになる気持ちは分か  
つてるから、逢崎とかほかの俺の周りの人には俺と同じ気持ちを味  
わってほしくないんだ」

一瞬、淀んだ空気を振り払おうとサイは明るくスイッチを切り替  
えて言う。

「つまり、なんていうか今回のことなんだけど……」

「いいよ、うん。わかった。大丈夫だよ、風祭くん」

言って、ひよりは一度深呼吸をした。そして、今日初めてサイと  
目を合わすと真剣な目つきで言い放った。

「私、お父さんのこと、大好きだから」

「そっか、よかった」

満足そうに頷き、サイは鞆を拾うと教室を出ようとする。

「ち、ちよつと待って」

「あの、私の友達、真綺と志織との約束があるんだけど、その」  
「なに？」

ぶわつとひよりの顔が真っ赤に染まる。サイはひよりの返答を待  
つように首をかしげた。

「あ、あのさ！ 風祭くん！」

目をぎゅつと瞑って、両の手は膝の前で硬い握り拳を作って、ひ  
よりは言った。

「ま、また明日あ」

気抜けするような言葉は尻すばみに消えていった。それでもサイ  
には届いたようで、

「うん、また明日」

サイはそう残すと教室を去っていった。

サイが去っていった教室でひよりが吐いた大きなため息には安堵  
と後悔が絶妙にブレンドされていた。

生まれてはじめてのサイとの会話。友人二人の盛大な勘違いを大

きく裏切り、予想通り報復屋の話だったが、サイの言葉には終始ひよりを氣遣った想いが含まれていた。今のひよりにはそれで十分だった。本当は真綺と志織に告白するように言われていたのだが結局言うことができなかった。けれど、それで十分。

家庭を壊した者に対する復讐心もサイに対する恋心も今は凧いでいた。

学生鞆にしまつてあつた携帯電話が鳴った。さっそく出歯亀心を働かせた二人からの連絡要求かと思い、少し億劫そうにケータイを引っ張り出す。『はいはい、予想通り失敗しましたよ』なんて報告の言葉を考えながら、一応着信相手を確認しようとディスプレイを見る。

ひよりは息を吞んで電話に出た。

「……もしもし？ お父さん」

そう、それは父からの着信だった。

少女な泣かない。陸（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 六日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。漆

「契約は以上でよろしいですか？」

「はい」

父からの電話からわずか一日、ひよりは件の喫茶店くだんにて報復屋との契約を交わしていた。

「お支払いのほうですが……」

報復屋の店主代理の少女　ツユリは申し訳なさそうに眉根をひそめる。

「あの、お金はないんですけど、これなら」

そう言ってツユリが差し出したのは父から授かった結婚指輪だった。今は母の都合で二つ、約束を誓い合ったはずの掛け替えのないものが今、机の上で復讐に変わろうとしていた。

「サイ」

ツユリはそれを丁寧に受け取ると、隣に腰掛けるサイに渡す。

サイはそのうちの一つを取り上げると目前に翳した。

しばしの間見入った後、静かに机上に置くとツユリに向けて報告する。

「本物の白金プラチナだ。これならおつりがでる」

ツユリ、ひより両名は頷くと、ツユリはひよりに向き直る。

「差額分は現金で構いませんか？」

「はい、問題ないです」

指輪を売ってしまえば生活の最後のつてが消えてしまう。しかし、ひよりには後悔の念はかけらもなかった。

「今回の契約料は……ですので、こちらでどうでしょうか？」

ツユリが電卓でたたき出した数字を見て、ひよりは顎を引く。

ツユリも笑顔で頷き返すと、

「では、この件を担当する風祭のほうから説明がありますので、私は退席させていただきます」

椅子を引き、立ち上がった。

ひよりとサイは二人、取り残される。机には一度も口をつけられていないコーヒ―が湯気を三つ立てていた。

「あの……」

先に口を開いたのはひより、しかしそれは自分が発言するための断りというより相手に発言を促すものだった。

少女の尻すぼみに消える声につられて、サイも重々しく口を開いた。

「……本当に、いいんだな？」

ひよりはサイの目を見据える。これはサイを裏切ってしまったことになるのだろうか。そんな可能性も考えたが、今はそんなことどうでもよくなっていた。ひよりは誓っていた。ほかの誰にでもない自分自身に。

「私、決めたから」

明確に、淀みない声で言ってみせる。

「わかった」

するとサイは目を瞑って何かを考えるように静かに頷く。

「これから、依頼内容の説明に入ります」

「いいよ、敬語なんて」

「今回の報復手段は偽装集団ストーカーで生きたいと思う」

サイはポケットから出すと、机の横に備え付けられている紙製のテールナプキンを一枚取り出す。それから、何を描くわけでもなくその上にペンを走らせていく。

「ストーカー？」

その単語は知っていた。しかし、今回の報復にどう結びつくのかわかりかねてひよりは小さく首をかしげる。

「そう、対象に大衆に監視されていると錯覚させ、精神的に追い込む」

喋りながら、サイは紙の上でペンを踊らす。始めはなんの計画もなさそうに動き出したペンが作り出したそれは次第に全体像が浮き

彫りになってくる。何かの模様にも見える。模様は左右どこか上下さらに同一点がみあたらないにもかかわらず、しかし、どこか統一感がとれていて。幾何学めいた何かだろうか、と、ひよりは一瞬疑問に感じたが深く考えないようにした。

「通常、個人的に行う行為を組織的に行うことにより対象を精神的に追い詰める」

説目を続ける間もサイの手は止まらない。その手ばかり目で追っていたことに気づいたひよりはが顔を上げるとサイの両目はしっかりとひよりを見据えていた。ひよりはあわてて再び視線をサイの手に戻す。

「逢崎？ 聞いているか？」

「え！？ し、集団ってことは、な、何人もつくの？」

焦ってどもってしまった。ひよりは気づかれないように小さく深呼吸を入れる。

「いや、あくまでそう錯覚させるだけ、実行するのは俺一人だよ」

「そ、そうなんだ」

「説明は以上だ、質問はあるか？」

正直説明は上の空だった。しかし、この人ならまかせられる。そうひよりは思った。

「あ、あの、よろしくおねがします」

「はい、承りました」

笑ってそう答えるサイの笑顔は報復屋、店主代理にどこか似ていた。

少女は泣かない。漆（後書き）

十日間連続更新宣言！ 七日目！



## 少女は泣かない。捌

『ごめんな、父さん。母さんとひよりを守れなかった』

逢崎ひよりは電話越しに聞いた父の謝罪の言葉を決して忘れない。  
『私は父を私から……私たちから父を奪った女が許せません。報復は女のほうにお願いします』

逢崎ひよりは報復屋に放った自分の言葉を絶対に忘れない。

日曜日、その名に恥じぬ燦燦とした太陽が放つ白い光は壮麗なる冬を演出し、雪化粧がなくとも白い景色が漂う休日の街は、行き交う人々の活気とは別に冬独特の静けさを醸し出していた。

そんな中、ひより、真綺、志織の三人娘は買い物にいそしんでいた。そのために少し遠出してきたのだから。遠出といっても電車で片道一時間もかからないのだが、三人は何気ない日常に潜む至福を心の底から満喫していた。……のだったが。

「ねえ、ひよりちゃん。あっちの店なんてどう？」

若干一名を除いては息絶え絶えであった。

「え、まだ見るの？ どうせ買わないんだからもうどこかで休もうよ」

両手いっぱい紙袋を持つ疲れ知らずの真綺に対してひよりはとうとう弱音を漏らした。

「それじゃ、せっかく遠出した意味ないじゃない、今日は思う存分楽しみましょー」

あくまでポジティブな真綺は「おー」と一人気合を入れる。

「じゃあ、次で最後ね？」

真綺は両手を合わせてひよりは懇願。

ひよりは指示をあおごうと、志織のほうに目をやると、すでにベロンチに腰かけダウン状態だった。普段はスポーツ万能な志織なのだ

が天を仰ぎみていかにも限界そうだった。

「えゝ、どうしよつかない」真綺は顎に手を当て考え「あ、アイスでも食べよう？」提案。

「うん！」

好物のアイスを引き合いにだされてはひよりも形無しだった。冬なのにとか関係ない。

「……やつと笑ったな」

その声に振り向くとベンチに腰かけた志織がニヒルに笑っていた。ボーイッシュな彼女がそうやって笑うと様になっているものだから後輩からのバレイнтаインのチョコを独占しているというのも頷ける。

「うんうん。ひよりちゃんは笑顔が一番だよ？」

対象的に真綺は花が咲いたようにひよりに微笑む。これで彼氏の一人も作らないんだから驚きだ。

「最近ひより元気なかったから心配したんだよ？」

近頃のひよりの不審な行動のせいで二人に心配をかけていたことに鈍感なひよりは今初めて気付いた。そして、こんなにも優しい友人をもったことを誇りに思う。

「ありがとう」

屈託のない笑み。それは本心からだった。

「ふう、疲れた」

本当は疲れていたらしい、緊張の糸が切れたのか真綺は志織の隣に腰を下ろした。

ひよりの心には本当に二人への感謝の気持ちでいっぱいだった。

「あ、ちよつとごめん」

ひよりは手を挙げ、二人に断りを入れる。

「あ、お手洗い？」

「うん！」

ちよつぱり嘘をついて、二人にプレゼントを買ってこようそう思っ  
てひよりは街に駆け出した。

どのくらい、走っただろうか、休日の繁華街を掛けるものだから、何度も人とぶつかりそうになってしまった。でも、そのくらい嬉しかったのだから仕方ない。

ひよりは足を止めて、息を整える。それから、ども店でプレゼントを買おうか、あたりを見渡す。先日 of 報復屋の件もあり、生活費のことも考えなければいけないので、あまり値段は裂けないのだが……。

はた、とそこでひよりの首の動きが止まる。見覚えのある顔が目に入ったからだ。

ひよりは自然その姿を目で追っている自分に気付く。だめだと分かっている、だめだと思えば思うほどにひよりの行動は理性から離れた動きをする。

それは、報復屋に復讐を頼んだ女と共に生活をしているはずの男。父だった。

二人には急用ができたメールを入れて帰ってもらった。我ながらなんと苦しい言い訳だ、なんて思ったが他のことに裂く思考が惜しかった。

自制する理性もあったが、やはり気になる。父の生活、女の容貌、そして復讐の進行具合。サイから後々報告があると事前の打ち合わせでわかっていたが、はやる気持ちは抑えきれない。

少しだけ、もう少しだけ様子を見て帰ろうと誓い、ひよりは物陰から父の姿を覗き見る。

が、しかし、やっぱりというべきか、ひよりは覗きの才能が皆無だったようであっさりと父に見つかってしまった。

振り向いた父と目が合う。あわてて、身を隠すも先に声を上げられてはしかたがない。

「ひより！」

良く響く、聞きなれた父の声。

「お父さん……」

ひよりは立ち上がると、おずおずと気まずそうに手を挙げ父を呼ぶ。

そんなひよりに父はつかつかと近寄ってくる。父は歩調を緩めることなくそのままの勢いでひよりに抱きついた。

「会いたかった」

何かを言おうとしたひよりの口からは言葉は出ない。

抱擁はほんの一瞬だった。父は体を離すとひよりの目を見据えた。「父さんが今住んでるところの近くなんだけど……今から来るか？」

ひよりは開きかけた口を咄嗟に閉じる。「女の人はいいるの？」とは聞けなかった。

「ただいま」

何の変哲もないマンション四階。扉を開けて父がつぶやいた言葉にひよりの言葉はちくりと痛む。

「おかえりなさい、あら」

玄関先に現れたのはエプロン姿の若い女だった。

全体的にふんわりとした、やわらかいイメージの女性だった。その姿を見てひよりは母の若い頃の写真を思い出した。

居たたまれず女性から目をそらし、父を見上げれば満面のしたり顔だった。

「いらつしゃい、ひよりちゃん」

自然に、女性はひよりの名前を呼んだ。それが非情に不自然で作為的でひよりは吐き気を覚える。

「ほら、上がって、今ちょうど夕ご飯の準備ができた頃なの」

逃げ出したい気持ちと一歩踏み出している父の生活を確認したい衝動。ひよりの心は二つに引き裂かれて揺れる。

「ほら、ひより」

決断もできぬままひよりは手を引かれひよりは一步を踏み出す。

女性の名前は晶子というらしい。そう父から紹介された。

リビングに通され、父とたわいもない雑談をぎこちなく交わして

いると、キッチンから料理が運ばれてきた。

出された食事は見事としか言いようのない品々だった。

きのこのキッシュにオニオンスープ、鶏のワイン煮、フランス郷土料理風に仕上がった料理たちは味、色合い、栄養のバランスも文句の付け所がない。父の苦手な野菜類もちゃんと父が食べられるよう細かく切り刻まれていたのが憎かった。

それから食事はただ淡々と過ぎてゆくだけの時間だった。

仲の良い、とりとめのない夫婦の会話、ただ一つの違和感。ひよりの存在。

そんなうつろいを打ち破るように、電話が鳴った。

リビングのテレビの横に設置されたファックス複合型の電話は飾り気のない呼び出し音を鳴らし続ける。

そうやって幾秒が過ぎただろうか、さすがのひよりにも二人の間に流れる異様な空気に気付いた。

「修二さん……」

晶子が、父の名を呼んだ。唇はわななき、顔は青ざめている。あきらかに様子がおかしい。

それでも、箸を置き、たおやかな所作で椅子を引き、立ち上がり受話器へと手を掛けた。

「いい、俺が出る」

それを制止したのは父。厳格な顔つきで、荒々しく椅子から立ち上がり、受話器を取った。そして、間髪をいれずに、

「もう二度とかけるなと言っただろ！」

叫んだ。温厚だった父の叫びなどひよりには初めてだった。そしてその意外性よりも恐怖が先行する。

怖い、感情の発露はとめどなく、未知に対する恐怖はあふれやまない。ひよりの中にはもう壊れるものなどない……はずだった。

「なんだ、金か？ 金が欲しいなら、いくらでもくれてやる。だから、やめてくれ、もう……だから」

父は猶も捲し立て続ける。風貌は鬼、決して小柄ではない父だが、

ひよりには普段より一回り大きく見えた。思わず身を引いてしまうが、下がれない。背もたれがあつたことに気づきひよりは上がった血流が下がるのを感じた。

「お金はだめだつて言つてるでしょ！」

晶子が叫びながら受話器を持つ父の腕にしがみついた。

「おまえは少し黙っている！」

父はそれを振り払う。晶子は激しく床に尻もちをついて、痛みに呻きを漏らしながらも再度立ち上がるうとする。

「ああ、いくら払えばいい、あ？」

お父さん

やめて、そう言おうと思った。しかし、ひよりの喉は震えない。

お父さん

やめて、感情を涙で伝えようと思った。しかし、ひよりの瞳からは光が失われてく。

お父さん。

お父さんお父さん。

お父さんお父さんお父さん……。

「だから、金は払うと！」

父に叫ぶ。晶子は父の手に噛みつき、受話器奪う。

「あなたに払うお金なんて一銭もありませんから！」

「俺はおまえの事を思つて言つてるんだぞ！」

振り上げられた拳が頬をはいいた。晶子は背中から床に倒れる。

「お父さん！」

ひよりは叫んだ。喉を震わせたのは感情よりも計算。

「もう、電話切れてるよ」

地面に落ちた受話器を拾い上げ、父に掲げて見せて、冷めた口調でひよりは言う。

「ごめんなさいね、取り乱してしまって、最近多いのよ変な電話が、それも、いろんなところからかかってくるみたいで」

頬を抑えつつ立ち上がった晶子が笑みを顔面に張り付けてひより

に向き直る。

今の電話、父は間髪をいれずに怒鳴りつけていた。しかし、ひよりの目に入ったナンバーディスプレイには見覚えがあった。記憶が確かならそれは父の勤め先のものであった。

つまりそれほど追い詰められているということなのだ。報復屋のおかげで。

胸中に言い知れぬ高揚感が宿る、今にも笑い出しそうなそれをこらえ、口を開こうとしてる父に向き直る。

「いつもは、晶子が一人のときにしかかかってこないんだが……」  
つまりは父がいるときにかかってきたのは初めてのようだ。

「そう、それが怖いのも、まるで見張られてるみたいで、それだけじゃないの、変な手紙とか……、一人で出かけているときも誰かに見られてるみたいで」

晶子の呼吸は浅く荒く、腕は自身を抱きしめるように震えていた。  
「くそっ！ 誰がこんなことッ！」

父が机に拳をあてる。低い音が部屋中に響き渡る。

「でもお金だけは……、お金だけは渡さないでちょうだい」  
ひよりにはこの女のそれが気に入らない。

「俺はお前のためを思って……」

報復は順調。それは自身の目で確かめた。しかし、

「なら、なおさらよ！ 私はお金が大事、それに向こうはなににも要求してこなかったじゃない！」

この女はなんだ？

「晶子」

諭すような父の口調。

「私の言うことに従って」

ああ、そうか……。ひよりは全てを悟る。

「ああ……」

父の頷きに満足したのか、晶子はようやく回りを見渡す余裕ができたようで、ひよりの存在に気づいたように笑みを作った。

「あら、ひよりちゃん。ごめんなさいね、こんなことになってしまったし、今日はちよつと帰ってもらえるかしら？」

「はい……」ひよりは頷く。

にぶい音がした。晶子は顎の下から鈍器で打ち抜かれ仰け反る。勢いよく背中から床に倒れる。そして、数瞬、痙攣のようにひくついたあと動かなくなった。

「ひより……っ！」

父の呼ぶ声が聞こえた。しかし、ひよりにはもう関係ない。

ひよりの右手には、家から出ていく際、持ち出したのであろう、父が毎週かかさず磨いていた優勝トロフィー。思えば、それだけが取り柄のつまらない父親だった。

ひよりはそれほど重くないトロフィー引きずりながら、じりじりと父のほうへと歩を進める。テニスラケットを持った男性がモチーフのトロフィーはフローリング調の床に血の道をつくってゆく。

「……………」

両手を体の前に出して必死に娘を諭そうとする父が、ひよりの目には入った。

だけど、その声はもう届かない。

ひよりは全てを悟った。

あの女は父の金目当てで父に近づいたのだと。

それを知ってか知らずか父は母と……自分を捨てた。

許せない。

当然女も許せないが、そんな女に女のために自分たちを見捨てた、この愚かな男が赦せない。

二人の不幸を目の当たりにしても、ひよりの怒気が鎮まることはなかった。

ひよりはトロフィーを振り回す。

右から左へ、遠心力に乗ったそれは男の側頭部に当たり、男は床へと転がった。

それでも、男は立ち上がった。打たれた頭を押さえ、上半身を小



刻みに揺らしながら膝立つ男は猶も口を動かし続ける。

けど、その男の声は聞こえない。

動きが緩慢になった男の息の根を止めるべく、今度は上から下へ両手で、渾身の力を込めて、鈍器を振り下ろす。

潰れる音は対して部屋には響かず、男は倒れた。

しかし、まだ息はあるようで、男は必死にひよりに向かって手を伸ばす。

その手がひよりの足首に触れた。

今度こそ確実に、そう思って、ひよりは鈍器を振り上げる。

そこで、ふと声が聞こえることに気付いた。

下を見る。しかし男の唇は何も紡いではない。

「……いさき」

声に耳を澄ましてみる。それはどこかで聞き覚えのあるような声。

「逢崎！」

かざまつサイ

風祭彩の声だった。

「もういい、やめろ！ 逢崎！」

ついに、幻聴か、とも思いつつもひよりはそれに応える。

「なんで？」

その疑問は心からだった。

「なんでじゃない！ お前の父親だろ？！」

サイの熱の入った説得が耳に入る。しかし、今のひよりの心は揺れない。

「どうして？ 父親は殺しちゃいけないの？」

その疑問も心から。

「おまえは親父さんに報復は望んでなかっただろ」

「気が変わったの」

ひよりは腕の疲れを感じてこのまま振り下ろそうかと考えた。むしろ、どうして振り下ろして憎き男の頭を割らず、幻聴なんか耳を傾けているのか。

「やめろ」

サイは静かに言った。

心からの懇願。サイが俯いている姿が目につかぶ。しかし、  
「どうして止めるの？ 私はこの男が憎くて憎くてしょうがないの  
！」

それが、気に入らなかった。湧き出た怒りはとめどなく少女の心を犯していく。

「なら、なんで……」

言ってサイの言葉は途切れた。そして大きく息を吸う音が聞こえた。

「ならなんでお前、泣いてんだよ！」

手でぬぐって確認しようと思った。しかし両手がふさがっている  
のでサイの言葉が真実かどうかは確かめられなかった。

「ごめんね、風祭くん」

もう、何もかもいい。

「逢崎！」叫び声が聞こえる「よく聞け、俺はお前が」  
ひよりは力いっぱい腕を振り下ろした。

少女は泣かない。捌（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 八日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。玖

逢崎修二 逢崎ひよりの父の新宅の向かいのマンション。四階二号室、薄暗い部屋を複数のモニタの明かりが申し訳程度に照らしていた。

八畳ワンルームの部屋には収納家具は一切なく、ノートパソコン、モニタ、マイクなど様々な機械類とコード類が地面に散乱していた。「はあ……」

その部屋の中心、座布団の上に胡坐をかいてモニターに見入っていたサイは短くため息を漏らす。

頭に掛けたヘッドホンを首に掛けなおす。両腕を伸ばし、体を空して大きく伸びをする。

首を横に振ってコリをほぐしたところで後ろから声がかかった。

「あゝひどいひどい」

ツユリだった。

ほんの数分前に仕事の進捗状況を確認しにきたツユリ。事の顛末を立ったまま眺めた彼女の第一声がそれだった。

サイは拳を額に当てて俯く。

計画は完璧だった。二週間にわたる浅川晶子が出かける際のストーキング、手紙類のマーキング、盗撮、盗聴、そしてその告示。他にも多種多様な手段を尽くした。外堀から埋めて、ゆつくりと精神を蝕んでゆく。逢崎の父親のほうにも確実にダメージが蓄積されているのも計算のうち、そこは当然のリスクとして切り捨て、復讐行動は遅滞なく進んでいた。

そこに何故か現れた依頼人、逢崎ひより。逢崎修二宅に設置された隠しカメラからモニタを通して彼女の姿を確認したとき、サイは一瞬その目を疑った。何事もなく帰ってくれることを望んだ。しかしそれは叶うことはなかった。

精神的に追い詰められた修二、晶子の両名はあろうことかかっ

てきた電話がストーカーからのものだと思い発狂したのだ。

サイは手元のノートパソコンで、修二宅の電話の着信履歴を開く、その番号を事前に漁っておいた修二身辺のデータと照合にかける。一致したのは修二の勤め先のものだった。

修二は自分の勤め先かからの電話をストーカーからのものと思い錯乱状態に陥った。

しかし、ストーカーからかかってくるはずはない。サイはカメラで修二がいなくてただけを選んで、無言電話をかけていた。それが、依頼人の要望だから。

「何が？」

サイは無感動に散らかった床を物色しはじめる。

「好きでもない女の子に告白するなんて……」

ツユリは若干茶化しの声色を含めて言ってくる。

しかし、それは面白がっているふうではなく、サイの行動に対して不満はあるが咎められない。微妙な感情が籠ったような言葉だった。

「しかたないだろ、それしか方法がなかった」

本来、就寝中に高周波の不快感を垂れ流す用に修二のマンションに設置したスピーカーだったが、まさかコンタクトをとるために使うなど夢にも思わなかった。

でも、そのおかげで、ひよりの行動を止めることができた。

父とその愛人の狂った姿に当てられたのか、ひよりはリビングに飾ってあったトロフィーを振り回し、修二と晶子に襲いかかった。

サイがもう少し止めるのが遅かったらひよりは確実に父親を殺していた。

実際に危なかった。ひよりが放った最後の一撃は狙から若干逸れ、床に深い傷を作った。そこにサイの言葉の力がどれだけ働いたのか分からないが、結果ひよりは父を殺さなくてすんでサイは胸を撫で下ろした。サイの脳裏にはひよりが父親のことを好きだと言ったとき表情がよぎる。

「それも向こうが自分に惚れてると知りながら」

ツユリの責めるような口調が何故か少し心強い。

「誰かさんが目標と依頼人の回りは徹底的に洗っておけというものですから」

言い返すと、ツユリは踵を返してドアノブに手をかけた。

「後始末は……」

「お任せください。店主代理」

お互いに、背中をむけて言葉を交わす。

ツユリは小さく頷き退出していった。

「はあ……」

サイは改めて安堵のため息を漏らす。

そしてやつとお目当てのものを散乱した機械類の中からお目当てのものを探し当てる。

手に持った無線機のスイッチを入れ、待機している二人に指令を飛ばす。

「マツ、ミモリ、聞こえるか？ マツは負傷者、及び依頼人の搬送

」

モニターで確認する限り修二も晶子も息はある。

「ミモリは依頼人が痕跡の抹消。指紋、監視カメラのデータ、目撃証言。足がつく可能性は全て潰してくれ」

了解の旨を告げる声と同時に二人は作業にとりかかる。

報復屋の仕事はばれたら終わりの一発勝負。常に保険の保険までかけておくことが基本だ。ここ数日、報復屋のメンバー数人にローテーションでその保険の役割を頼んでおいた。

モニター越しに二人の作業を確認しながらサイも散らかった部屋の撤収に入る。

こうして、二週間にわたる長丁場の仕事は失敗に終わった。

少女は泣かない。玖（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 九日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。拾

いつもどおりはやく起きてしまったひよりは家に居ても所在なかったので、母の愛情のたつぷりな弁当の完成と同時に、それを受け取り家を飛び出した。

そしてひよりは思いだした。学校に行ってもやることがないことに、学校についてから思いだしたのだ。下駄箱あたりで。

がつくりと肩を落とし、ひよりは教室に向う。教室のドアに手を掛け、開こうとしたところでひよりの動きは止まった。

教室の中に、先客がいた。

ひよりはすばやく膝を折り、しゃがむ。なんてことはしない。

とくに隠れることなくドアに付けられたのぞき窓から教室の中を窺う。

教室の中にいた人物は予想通り風祭彩かざまつばいであつた。彼がこんなに早くに学校に来ているのは久しぶりだ。そして今日は一人。

ひよりは深呼吸　せずに教室の扉を開く。

軽快な足音を鳴らして自分の席までたどり着くと、鞆を机の上に置き、振り返つて言った。

「おはようっ」

「おはよう」

あれ以来、サイと言葉を交わしたのは初めてだったが、自然に言葉は返ってくる。

ひよりはあの日、ひよりがしたことの後始末をサイが全てしてくれたことをツユリから聞いていた。

そして、あの日、自分を引き戻してくれた最後の言葉もちゃんと覚えている。

今、改めて思いだすと胸が高鳴るのが分かる。でもサイにはばれないように平静を装う。

でも、ひよりには分かっていた。あの言葉の真意も、サイの気持



ちの在り処も、自分の心の片づけ方も。

「あのさ、風祭くん？」

「なんだ？」

冬の日差しは白く、サイの頬を照らす。

反射した光が少し眩しくてひよりは目を細める。そして、今更ながら自分がサイの顔を見て喋れていることに気がついた。

「このあいだの……、告白のことなんだけど……」

サイの真摯な瞳。それは彼なりの贖罪のつもりなのだろう。ひよりはもうこれ以上サイの表情が曇るところを見たくない。そう思っ  
てひよりは言葉を続ける。

「ごめんね、今は家族が大事だから」

言って……しまった。しかし不思議と後悔はない。

「そっか」

目を瞑って穏やかにサイは頷いた。

それから、ひよりとサイはしばし、とりとめのない話をはずませ  
た。

春はまだ遠い二人きりの教室。次の来訪者が訪れるまで、少女と  
少年の声はしつとりと響いた。

少女は泣かない。拾（後書き）

十日間連続更新宣言！ 最終日！  
詳しくは活動報告にて！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6816m/>

---

報復屋ゼットー “Am I the number Z”

2010年12月30日02時10分発行